



聖徒の道

1973

8月号

末日聖徒イエス・キリスト教会

もくじ

イエス・キリスト、しかも十字架につけられた

キリスト以外のことは、何も知るまい	ハロルド・B・リー	337
大嵐の中の平安	ジョイス・A・オーガン	340
かけ事の害悪	ダーリン・H・オークス	344
従順な家族	ヘンリー・B・アイリング	349
大いなる背教	ハイド・M・メルル	354
おもちゃばこ		357
ちいさなお友だちへ（私たちのめうし）	デビッド・B・ハイト	358
ヨナ	メアリー・L・ラスク	360
よい知らせ	テルマ・アンダーソン	362
律法を超えた自由	ハートマン・レクター・ジュニア	365
改宗者	スターリング・W・シル	368
救いの福音を教えなさい	ハロルド・B・リー	369
祭壇、天幕、井戸	A・セオドア・タトル	374
主と誓約を交わす	エルレイ・L・クリスチャンセン	377
悩める人のために	ロバート・J・マッシュー	380
ローカル・ニュース		382

大管長会

ハロルド・B・リー
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

統一誌編集主幹

ラリー・ヒラー

日本語コーディネーター

八木沼修一

ローカル編集

高木まりゑ

十二使徒評議員会

スペンサー・W・キンボール	ハワード・W・ハンター
エズラ・タフト・ベンソン	ゴードン・B・ヒンクレー
マーク・E・ピーターセン	トーマス・S・モンソン
デルバート・L・ステイプレー	ボイド・K・パッカー
リグラン・リチャーズ	マービン・J・アシュトン
ヒュー・B・ブラウン	ブルース・R・マッコンキー

今月のレタリング

滝下はるか

諮問委員会

J・トーマス・ファイアンズ（内務伝達部長）、ジョン・E・カー（配送・翻訳部長）、ドイル・L・グリーン（教会誌編集主幹）、ダニエル・H・ラドロウ（教育資料担当主幹）

聖徒の道 8月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

東京都港区南麻布5-8-10

配送 東京ディストリビューション・センター

東京都港区南麻布5-10-25

定価 年間予約 1,300円 1部 130円



イエス・キリスト しかも十字架につけられた キリスト以外のことは 何も知るまい

大管長 ハロルド・B・リー

使徒パウロは、彼の務めの目的について、意味深い言明をし、その教えの要旨を概略して述べている。教会と神の王国の献身的な僕であったパウロは、コリント人に向けて次のように書き送った。

「兄弟たちよ。わたしもまた、あなたがたの所に行ったとき、神のあかしを宣べ伝えるのに、すぐれた言葉や知恵を用いなかった。

なぜなら、わたしはイエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは、あなたがたの間では何も知るまいと、決心したからである。」(Iコリント2:1, 2)

この短いメッセージを通じて、私は、「イエス・キリストしかも十字架につけられたキリスト以外のことは知るまい」と決心したパウロの宣言から、彼が一体何を考えていたのかという点に、あなた方の思いを向けていただきたいと願っている。

啓示を受ける偉大な資質と、主からの啓示の賜物に恵まれた古代の預言者たちは、将来起こるべき事柄を、まるで歴史書でも書くかのように予言した。モルモン經を読むと神の預言者に与えられるこの天来の賜物について、ニーファイの民に向けた最後の説教でモロナイが次のように書き留めていることがわかる。この説教でモロナイは、数世紀後に起こることを書いている。

「見よ、私はあなたたちが今目の前にあるかのように話しているが、本当はあなたたちはまだ生れないのである。しかし、イエス・キリストが前以てあなたたちを私に見せたもうたのであなたたちの行いが今私に解るのである。」(モルモン8:35)

時の始まり以来、正しく指名された神の預言者たちは、モロナイと同様、目の前で起こっているかのように、まだ起こっていない事柄について啓示を受けてきている。これは、イエス・キリストがその一連の出来事の確かであることを知らせるために聖なる人々に示して下さっているからである。預言者アモスの言うように、「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない」のである。(アモス3:7)

世の歴史のうちで、キリスト・イエスの降臨ほど、東西両半球の預言者たちに明快に啓示された出来事はなかった。「この世界の神」としてのイエスの本質、そして永遠の父なる神との関係などは、十字架上ではりつけになり、そして復活された主が、このアメリカ大陸のバウンテフルの地の民に御姿を現わされたときに、明確に説明された。

これは次のように記録されている。

「その時主は群衆に向って言いたもうた。

『汝らわが肋にその手をさし入れ、わが手足にある釘あと

に触れて、われがイスラエルの神にして全世界の神なること
またわれが世の人の罪を負うて一度殺されたるを知るために
起ちてわれに近づけ。』(Ⅲ二一ファイ11:13, 14)

このような神聖な宣言を通じて、主は世の人々に確固たる
知識を与えておられる。その知識とは、主がこの世に降臨さ
れる以前から神であったこと、だが御父とは異なり、前世で
は骨肉の体を持たず、死すべき生涯を始めるときに骨肉の体
が与えられたこと、そして、その後復活体を受けたことなど
の知識である。

卓越した識者に数えられるジェームス・E・タルメージ長
老が、その著「基督・イエス」の中で説明しているように、
「『永遠の父なる神』はこれまでにごく稀にしか地上の予言
者や啓示を受ける者たちに御姿を現わされたことはなかつ
た。しかもそのときは、もっぱらイエス・キリストが真実神
の御子であることを証するときであった。」(第1巻P.32)

例えば、イエスのバプテスマのときがそうであった。この
とき御父は、バプテスマのヨハネにバプテスマを施された御
子を、次のように紹介された。「これはわたしの愛する子、
わたしの心にかなう者である。」(マタイ3:17)

アダム、ヤコブ、アブラハム、モーセそしてその他多くの
予言者に与えられた主の予言の御言葉を再三再四読みさえす
れば、人はだれでも、あらゆる神権時代に、主の降臨の備え
として、主が世の人々に確固たる知識を送り続けていること
がわかるであろう。この知識を通し、主とはだれなのかを知
り、救いの計画により、全人類を贖うために降臨された使命
を知ることができるのである。この救いの計画のおかげで、
すべての人類は、福音のおきてと儀式とを守ることにより救
われるのである。

イザヤに与えた直接の啓示により、主は御自分が若い乙女
を母として生まれることを予告された。この予言者は、「聖
者」が「侮られて人に捨てられ、悲しみの人で悲しみを知っ
ていた」ことが示され、またこの「聖者」が全人類のとがの
ために傷つけられ、砕かれること、さらにほふり場にひかれ
て行く小羊のように自ら進んで犠牲になりたもうことが示さ

れた。イザヤはまた主が罪人と共に死んだ後、富める者の墓
に葬られることを予言した。(イザヤ53を参照)

誕生以来、また12歳のとき以来、少年イエスが全能者の加
護のもとに生活していたことは疑いの余地がない。これは過
越の祭のときの出来事から明らかである。このとき、ヨセフ
とマリヤはエルサレムの神殿で教師たちと言葉を交わしてい
る少年イエスを見つけた。母マリヤは、やさしくイエスを叱
って「どうしてこんな事をしてくれたのです。ごらんない、
おとう様もわたしも心配して、あなたを捜していたのです」
と言った。このとき、イエスが答えた意味のある言葉を忘れ
てはなるまい。「……わたしが自分の父の家にいるはずのこ
とを、ご存じなかったのですか。」この言葉はイエスが天父と
並み並みならぬ関係にあることに注意を向けさせるものであ
った。この点で疑いの余地は全くない。思いやりのない叱責
ととったり、キリストとなる子供から出るはずの言葉ではな
いなどと考えるべきではない。母はこの言葉を理解すること
ができなかったが、記録にあるように、「これらの事をみな
心に留めていた。」(ルカ2:48-51)

伝道が年と共に進むにつれ、当時の政治的圧迫から解放し
てくれる政治的指導者を捜し求めていたユダヤ人には、イエ
スの伝道がそのような性質のものではないということが段々
とわかりかけてきた。イエスの全使命は、人生の霊的な面を
強調し、永遠の救いの計画を打ち立て、この計画によって
イエスの贖いの犠牲が効力を発揮し、すべての人類が福音の
おきてと儀式とを守ることによって救われるようにすること
にあった。さらに言えば、「世の初めからはふられた小羊」
(黙示13:8 欽定訳および日本聖書刊行会「新改訳」、欄外
別訳)として降臨することになった。主は私たちを墮落から
贖うために降臨された。これは復活の初穂となるためであり
墓に眠っていたものが皆、墓から出て「善をおこなった人々
は、生命を受けるためによみがえり、悪をおこなった人々は
さばきを受けるためによみがえ」(ヨハネ5:28, 29)ること
ができるようにするためであった。

つまり、主の降臨の目的は、御自身が骨肉の体を持つ神の

独り子であることを世に示し、さらに至高の犠牲によって、御自身が誠に世の贖い主であることを示すことにあったのである。

復活後、西半球の聖徒と共に過ごされた主は、最後の訓戒の中で、救いを求める者ひとりびとりに対し、主の伝道の完全な意義を手短かに述べられた。このアメリカ大陸に住んだニーファイの民に対し、復活された主は最後の説教で、次のように述べられた。

「そもそも、清からざるものは御父の王国に入ることを得ず。信仰をし、すべての罪を悔い改め、終りまで誠をつくし、以てわが血によりてその衣を洗いし者のほかには御父の安息に入り得る者なし。

さて、世界の隅々に至る者たちよ。汝らは聖霊を受けて聖められ、また終りの日にわが前に罪なしとせられんために今悔い改め、われに来てわが名によりてバプテスマを受けよ。これ汝らに与うる命令なり。

われまことに、まことに汝らに告ぐ、以上はわが福音なり。」(Ⅲニーファイ27：19-21)

世に対する末日聖徒の宣言である信仰簡条には、キリストの伝道と贖いの犠牲とが、この地上にかつて生き、現に生きまた将来生きるすべての人々の救いに、どのように関連しているかということについて、概要が述べられている。この信条の宣言から引用してみよう。

「われらは、キリストの贖罪により、すべての人類は、福音のおきてと儀式とを守ることによりて救われ得ると信ず。」(信仰簡条第3条)

主の御名を冠する回復された教会には、この神権時代に与えられた靈感あふれる啓示を見出すことができる。こうして天との回路がはっきりと確立され、この回路を通して権能の鍵がもたらされ、その結果主の教えを受け入れ、従う人々の生活に律法と儀式が効果的に働くようになったのである。

「そもそもこの事の全部に関する偉にして大いなる秘密と、われらの前にあるこの問題全部の『至善』とは聖なる神権の権能を得るにあり。およそこれらの鍵を与えられた人

は、生くる者たちはもちろん、死にたる者たちも救う人の子らの救いに関する事実の知識を得るにいささかの困難をも感ぜず。」(教義と聖約128：11)

キリストの真の弟子が与えるあらゆる教えも要旨は、すべての人々が、神と神のつかわされたイエス・キリストを知るように教えることであり、またこの御二方を知ることが永遠の生命につながることを教えることにある。

あらゆる聖典を通して、主は私たちが永遠の目標を常に仰ぎ見ているよう戒めておられる。こうして私たちは、主と神の御前に帰るために備えをするのである。

昨年、当教会の軍務関係委員会の招きで、合衆国海軍の従軍牧師局長である海軍少将が私たちを訪れ、重要な会談をする機会があった。その少将の訪問の目的は、明らかに、私たちの教会の青年が、従軍牧師としての推薦を受けるに先立って、その資格を得るに充分な訓練を積んでいるかどうか調査することにあった。他の教派では、根本的な推薦条件として神学校でかなり高度な教育を受けていることが必要だったからである。

セミナリーやインスティテュートのいくつかを訪問し、またブリガム・ヤング大学とそこで行なわれている予備役将校訓練部隊の課程を見学し、献堂前のプロボ神殿や、宣教師プログラムと家庭の夕べプログラムなどを含めて、青少年と若い成人に關係する教会の様々な部局を見学したあと、少将は教会幹部の代表やその他の人々と共に、送別の晩餐会に臨んだ。このとき、少将は簡潔に自分の経験を述べ、彼の受けた印象を話して席についた。そのとき述べた彼の観察は、実に深遠なものであった。「あなた方の教会では、あらゆることがキリスト中心におかれています。私は、自分の教会にも他の教会にも、あなた方の教会が会員たちに与えているのと同じようなものがあればどんなによいだろうかと感じています。」

私たちが願い、祈ることは、この大切な訪問者の言葉が、真実教会のあらゆる活動と教えにあてはまり、そして使徒パウロのように、イエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは、何も知るまいと決心することである。

大嵐の中の平安

突風とひょうの嵐がアリゾナ一帯に大被害を与えて吹き荒れているとき、聖餐会につどった人々は突然の停電でまっくらになった礼拝堂の中に平安と友愛を見出した。

ジョイス・A・オーガン



1 972年9月11日月曜日の朝、私は隣近所を見わたして、自然が人や建造物や作物にこれほどの大損害をよくも与えたものだと驚いていました。

その前日、メサウエスト・ステーク部アルマワード部の日曜日はいつものように始まりました。私の家族も教会の他の家族と同様に、ひとつの集会から次の集会へと忙しく、その日に非常に劇的な方法で神の御手を心に感じるようになるとは思いませんでした。

した。

夫のドンには、聖餐会のプログラムを組む責任があり、その日のテーマは伝道でした。彼は、ベンとエリーというしあわせそうな若いヒル夫妻に、ワード部の会員にとって求道者を探す宣教師を助ける励みとなるように、彼らの改宗とバプテスマが生活にどんな変化をもたらしたかを話してほしいと頼んでありました。

日曜日の朝、エリーから末の子供がとても具合が悪いので教会に行けない

という電話がありました。でもベンは行きますということでした。そこでドンは、別の改宗者のカップル、ジャックとジャン・ライト夫妻のことを考えました。ジャックは快く突然の第2話者の責任を引き受けてくださいました。ドンは、このふたりの立派な兄弟でプログラムは万全だと、ほっとしました。私たちのだれひとりとして、もっと強く、もっと愛の深いふたつの手、聖餐会の間中私たちを包んでいようとは知りもしませんでした。



その日の午後、私たちはライト兄弟姉妹の車に同乗して教会へ向かいしました。車が東へ曲がると、美しいスーパーティション山脈が眼前に横たわりその上には雲が幾重にもきれいに重なっているのが見えました。私たちは口をそろえて言いました。「今晚はきつと嵐ですよ！」私たちはそれから教会で受ける霊の聖餐のことに思いを馳せそのことはそれきり忘れてしまいました。

聖餐の祈りとパスが終ると、ライト兄弟が最初に話しました。とても霊的な良い話でした。ある教会員がライト兄弟のことを思って忍耐強く福音について話して聞かせ、とうとう彼を宣教師のレッスンを受けるまでに導いたという話でした。彼はどんなにこのことに感謝し感激したことでしょうか。そのことは彼の人生に何という違いをもたらしたことでしょう。彼は、私たちのひとりびとりが友だちに福音を分かち与えることはどんなに大切か、そしてあきらめずにそれ続けることがどんなに大事であるか、話しました。

ライト兄弟の話のあとは、トムとデビッドというグラフィカ家の兄弟が子供の歌をメドレーで歌いました。とても上手に歌ったので、だれも戸外が暗くなっていくことや礼拝堂のまわりを吹き荒れる風の音に気づきませんでした。

それからヒル兄弟が立って話しました。彼は福音が生活にどんなに大切かということ話を始めましたが、やがて風の音で声が消されるほどになり、窓には稲妻が走りました。人々は席に

ついたままでそわそわし始めました。風の音は刻一刻と激しさを増していきました。急にひょうが屋根に打ちつけて、音が大きかったためにベンはしばらく話を中断しなければなりませんでした。

すると嵐は襲って来たときと同じように突然に、静まりました。ベンは笑って言いました。「今晚ここに来る途中で、私は主の約束について考えました。二度と地球に大洪水を起こさないという約束です。」聞く人たちから和やかな笑い声起きて、その場の緊張はほぐれました。

すると、一瞬のうちにやんだ音がまた突然聞こえ始め、前より一層ひどくなりました。礼拝堂の明りは消え、多くの暗闇になりました。

皆身近かな隣人であり、福音によって結ばれた兄弟姉妹である500名近くの男女子供が、とどろき猛り狂う嵐の中で、真暗な礼拝堂に座っていたのです。屋根を叩くひょうの音で、耳を近寄せなければ隣の人の話が聞けない状態でした。

驚いたことには、その嵐にもかかわらずその場には平安と満足があり、恐怖の声はひとこともあがりませんでした。ひそひそ話をしたり、泣き出したりする子供もいませんでした。全員が非常に冷静でした。外で荒れ狂う嵐への恐れではなく、中に満ちる平安のみたまによって静まっていたのです。

この和やかな静けさはだんだん広がっていくようでした。そして礼拝堂のうしろの方で、だれかが「感謝を神に

ささげん」を静かに歌い始めました。すると静かにひとりまたひとりと加わって、いつしか全員が歌っていました。歌声をひとつに盛り上げるこのような平安な気持を、私たちは日曜学校での歌の練習では一度も経験したことがありません。「黒雲せまり来て、平和を乱すとき」という言葉が胸に迫って、胸はいっぱいになり、涙が頬をつたい始めました。のどが詰まり、「明るき希望あり、救い近きを知る」という次の言葉はほとんど声になりませんでした。

だれも身動きひとつしませんでした。心に宿り続ける平安とこのうるわしいおとずれの静けさを破る人はいませんでした。

「主」に疑いはなし、日々に証を持つ。」何かが私の心を動かしました。同じように、教会の初期の時代に迫害を耐えた聖徒たちもこのように感じたのでしょうか。

この美しい讃美歌を歌い終えると、指揮者は「恐れず来たれ聖徒」を歌い始めました。再び私たちは皆ひとつになりました。

外はまだ嵐でした。しかし中には愛と友情のうるわしい気持がみなぎり、モルモンが伝統として受け継いでいる音楽が私たちの心と声をいっぱい満たしていました。

「無益な憂いは払いて努めよ、されば喜ばん。」そして「すべては善し」と歌ったとき、そのとき私は知りました。そうです。それは開拓者たちが感じた気持でした。すべては善し、まさ

にそのときすべては善かったのです。私は、あの暗い礼拝堂の中の全員の心にその同じ気持が広がったのを感じることができました。皆そのことを知っていました。

停電のためにマイクは使えませんでした。それでも、美しい歌が終わるとヒル兄弟が再び立ち上がって話を続けました。嵐の音は段々衰えてきました。若い改宗者が心を込めて「みたま」について証するのを、皆は静かに聞きました。

それから私の夫のドンが伝道プログラムについて述べ、隣人に対する私たちの責任を思い起こさせました。真暗な礼拝堂での彼の話を聞きながら、人々は彼の真心に打たれているようでした。しかし、私やヒル兄弟やライト兄弟姉妹ほど、彼の言葉の本当の心を知った人は少なかったと思います。ドンはヒル兄弟姉妹とライト兄弟姉妹の2家族を宣教師として教えたからです。

それはだれもが初めて経験した珍しい集会でした。激しい大嵐のさなかに45分以上にわたって全くの暗闇になった集会でしたが、彼が話し終えたとき平安と幸福感が全員から湧き上がって礼拝堂に満ち満ちました。

監督が立ち、嵐で大きな被害が出、道に電線が垂れ、木が倒れているので閉会後はよく気をつけて帰宅するようにと注意しました。そろそろと礼拝堂を出た私たちは、わが目を疑いました。木の枝やシュロの葉があちこちに散らばり、特に驚いたことには、道路のへりや溝にひょうが積み重なって車のラ

イトに照らされ、キラキラ輝いていたのです。暑く乾燥したアリゾナにひょうが降ったのです！

車で家に帰る途中、通りには水があふれ、あちこちで電線が車道をふさいでいました。私たちは何事があったのかを徐々にはっきり知り始め、家族全員がいっしょで、しかも一番の場所である主の家にいられたことを、とても感謝しました。

家の近くに来ると、夢を見ているような光景でした。多くの家の屋根がはがれて、宙を舞い、別の家に落ちていました。窓ガラスはひょうで粉々に割れていました。私の家の前の道路は、木材や板切れや戸やひょうで埋まっていました。

しかし奇跡的に、教会に行っていた人たちの近くの家は、とりたてて被害を受けていない家が1軒といわずありました。私の家の被害は、屋根板が少しと塀が2箇所破損しただけでした。

皆はすぐに作業衣に着換えて、片付けをする近所の人の手伝いをしました。末のふたりの娘と私は罹災家族の子供たちを呼んで食事をしてもらいました。隣近所の家では雑布やバケツや、ベツドのカバーまで丸めて、水を吸い取ったり拭き取ったりぬぐったりしました。

私たちはその晩の異様さを見ていながら、翌朝になり日の光の中であたり様子を見てやっと被害の大きさを知りました。礼拝堂で平安な心を感じたことを思い出して、私たちは被害を確かめに教会へ行ってみました。破壊と

混乱のただ中にすっと落ちていて立つ、美しい私たちの礼拝堂を見たときの畏怖の念は、言葉では言い表わせません。1枚の屋根板も乱れていませんでした。1枚の窓も破れていませんでした。美しい尖塔も、塔の頂上でまっすぐ曲がらずにそびえていました。礼拝堂の後方30メートルも離れていない所では、野球場の頑丈な照明用のポールが2本、ねじ曲がって地面に倒れていたというのに。

ポールの曲がり具合から、たつまきは、家々から屋根をさらい、360メートルほどの空地为野球場までまっすぐ東に向かってきたことがはっきりわかりました。そしてまるで集会所のまわりに見えない障壁が置かれたように、疾風は建物の上を乗り越え、礼拝堂の正面でまた下に降りました。正面の15メートルも離れていない所には、曲がったり折れたりした木の枝が山になっていました。たつまきはそれから何丁もの地域に破壊の爪あとを残しながら通りを下りました。15分そこそこの時間に、たつまきは20キロ四方に数億円もの損害を与え、ゴルフボールほどもあると言われたひょうを残していきま

した。しかし、この恐ろしい災害の中で、主は聖徒たちを守られました。私たちがすばらしい平安のみたまを感じたのは、それもそのはずでした。すべては善し！

オーガン姉妹は、メサ（アリゾナ）ウェストステーク部アルマワード部日曜学校指揮者として働く主婦である。

「教会は、昔も今も変ることなく、
いかなる形のかけ事であれ、常に反対
してきている。運任せの勝負ごと、ま
た、お金を持っている人からそれに伴
う代価の交換なしにお金を巻き上げる
ようなたぐいの職業についても同様で
ある。また、無謀な投機を助長する
ような傾向のあるあらゆる慣行にも
反対しているし、特に教会員とこの
地域社会の人々の全般が、これまで維
持してきた、高い道德水準を低下させ
たり、弱めたりする傾向のあるもの
には、強く反対している。」

ヒーバー・J・グラント大管長

かけ事の 害悪

ブリガム・ヤング大学学長
ダーリン・H・オークス

かけ事が人々を引きつける第一の理由は、時代を問わず、『何もせず
に手に入れる』という魅力にある。

純然たる形のかけ事は、何か価値あるものを、多かれ少なかれ運任せの
勝負にかけるといふ冒険行為である。かけ事に対する教会の態度は、1925年9
月21日、ヒーバー・J・グラント大管長と副管長によって出された次の声明
に、明確に示されている。

「教会は、昔も今も変ることなく、いかなる形のかけ事であれ、常に反対
してきている。運任せの勝負ごと、また、お金を持っている人からそれに伴
う代価の交換なしにお金を巻き上げるようなたぐいの職業についても同様で
ある。また、無謀な投機を助長するような傾向のあるあらゆる慣行にも
反対しているし、特に教会員とこの地域社会の人々全般が、これまで維持
してきた、高い道德水準を低下させたり、弱めたりする傾向のあるものには
強く反対している。

それゆえ、私たちは、全教会員に、ここに提示された見解に反するいかな
る活動にも参加することのないよう強く勧告するものである。」

その後、教会の指導者たちによって出された声明は、この強固な立場を一
層明確なものにしている。

かけ事は古くからある悪であって、昔も罪悪として認められていた。東洋
のかけ事の中には、その起源を紀元前2100年頃までさかのぼるものもある。
古代エジプトでは、かけ事の罪で有罪を宣告された人々は、採石場送りにな
った。かけ事は、ヒンズー教典²でも、コーラン³でも、タルムード⁴でも非
難されている。アリストテレス⁵もかけ事に興ずる人々を非難した。

かけ事は中世に、特に貴族の間に広まった。だが、こうした運任せの勝負
事に興じていた人々でさえも、少なくともそうした勝負事が他人に与える悪
影響を認めている。イギリスでもフランスでも法律を制定して、かけ事が家
臣に与える有害な影響を防ごうとした。かけ事が家臣を怠惰にしまい、
弓術の訓練を無視する原因になり、ひいては国家存亡の危機を招く可能性を
はらんでいたからであった。

かけ事の最も一般的な形のひとつは、富くじであった。これは労働者階級
の人々の間で行なわれ、17・8世紀には英語を話す諸国に普及した。エリザ
ベス女王は、1576年、イギリスで初めて、国営富くじを行なうと宣言した。
1660年には、チュニヤやアルジェで奴隷になっているイギリス人や、トルコ
のガレー船で強制労働をさせられているイギリス人を身請けするために、富
くじで身の代金をつくり出すことさえ行なわれた。また、富くじは1800年代
初頭に合衆国で広く行なわれたため、ニューヨーク州内だけでも200に及ぶ
富くじ営業所があった。1832年には、富くじ札の総売上は150億円にものば
り、この金額は合衆国政府の国家総予算の5倍に相当した。

これまでたびたび言われてきたことは、その当時、信頼できる銀行がほと
んどなかったために、富くじだけが膨大な事業を経済的に支える一般的な方
法であった、という説である。すなわち、巨額の資金を手に入れるための有
効な手段としては、あまり豊かでない市民から、お金を少しずつ何度も取り
たてるといふことしか手段がなかったのである。

しかしながら、こうした利点があるにせよ、1800年代の前半には、富くじ

に対し、世論の反感が起こった。そして1850年までには、多くの州で富くじやその他のかけ事を禁ずる法律が起草された。今日では数多くの州で、こうした同じような法律が制定され、合法的なかけ事を防ぐ防波堤となっている。だが、そうした規定は現在でも攻撃の対象となっているのである。

富くじに対する反対は、最初、1773年にイギリスで起こった。この時、ロンドン市は英国下院に対し、富くじが国の商業力をそこない、国民の福祉と繁栄を脅かすという理由で、富くじを廃止するよう要請した。1808年、下院では特別委員会を設立して、富くじに伴う害悪の調査にあたらせた。この委員会の報告により、数年後イギリスでは富くじが禁止されるに至ったのであるが、この報告は非常に当を得ているため、160年たった今でも、つい先週の報告を受けているような感がある。

委員会の報告には、平安に満ち、人々の尊敬を集めていた人々が、貧困のどん底にまで転落した事例が数多く載っている。また家庭の不和、暴行、家族の平和の破壊などを引き起こした事例、投機におぼれるあまり、父親が家族を見捨て、母親が子供を養育せず、あるいは妻が夫の給料を使い果たし、人々が衣服やベッド、はては結婚指輪まで質に入れるという事例などが報告されている。

また次のようなことも報告されている。「その他の場合でも、子供が親のものを奪ったり、召使いが主人のものを奪ったりすることが起き、また一時自殺も急増した。富くじの悪影響によって、直接、間接を問わず、およそ想像できる限りのあらゆる罪悪が引き起こされている……」⁹

そして、この委員会の報告は最後に、富くじ制度の基盤は、その悪の要素が非常に強力なため、議会がいかに規制策を講じてくぎをさそうと、歳入を得るための効果的な方法として富くじを採用するなら、同時に、富くじに伴う害悪をいくら取り除こうとしても、不可能なことである、と結んでいる。

州の富くじが、ひどく逼迫した公共の財政をうるおすための魅惑的な方法として、売りに出されているときでも、富くじというものは、あらゆる歳入手段のうちで、最も堕落した方法であるということを心に留めておいた方がよいであろう。私たちが知らずに払っている物品税以上に、富くじの重荷はその大部分が、貧困な人々の肩にかかっており、しかもそのような人々が、この種のかけ事の主たる客となって、この制度をささえているのである。

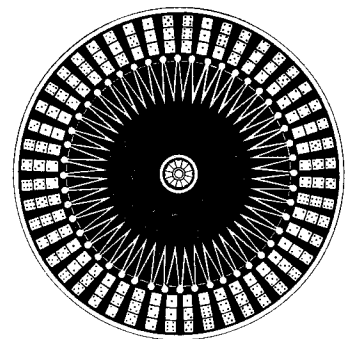
私たちの教会の指導者が、かけ事を避け、私たちの共同社会で行なわれているこの邪悪な行為と対抗するよう教えるのには、少なくとも5つの理由が考えられる。

まず第一。かけ事は、何もせずに何かを手に入れるという頹廢的な魅力を持ちつかせることにより、国家繁栄の基盤である労働、勤勉、節約、奉仕などの諸徳を損なう、ということである。さらにその上、かけ事は怠惰な風潮を助長し、その結果、社会に数々の悪影響を残すだけである。

6代目の大管長であったジョセフ・F・スミス大管長は、イエス・キリストの福音における労働の徳の重要性を、次のように強調して語った。

「私たちはまず善良、忠実、また正直で勤勉な人にならなければ、本当に良い、信仰深いキリスト教徒にはなれないと思っている。それで私たちは、勤勉、儉約、謹厳を説く福音を宣べ伝えている。怠惰な者は働く者のパンを

「私たち末日聖徒が、主のみたまのささやきに調和しないような行為をしているとき、私たちはいつも莫大な代価を支払っているのである。私たちがみたまの力強い影響を受けずに取り残されるなら、容易に誘惑を受け、他人を批判する習慣に陥り、世の勢いと悪しき者の業にもあそばされ、打ちのめされることであらう。」



食べることができないし、怠惰な者は教会の中で地位を与えられない、と説いている。」⁷

スティーブン・L・リチャーズ副管長(1879—1959)は、かけ事とは「ある人がもうけるために、他の人が損をするという前提のもとに進められる」ものである、と言った。さらにリチャーズ副管長は、かけ事に含まれている運不運の要素は、かけ事にふける人々に、人生では運こそが支配的かつ最も有力な影響力であると信じ込ませようになる、と断言した。「そして、かけ事にすっかり取りつかれている人々があるが、そのためにこのような人々は、かけ事の持つ運というものに頼らなければ、他に、自分の収入を増やす方法を考え出すことができないのである。」⁸

かけ事の第二の害悪は、かけ事が貪欲、貪らんと助長し、その結果、必然的に、隣人のものにまで手を伸ばし、またかすめ取るという卑しい行為をも助長する、という点である。ミズーリ州カンサスシティーにある聖パウロ神学校のメソジスト派の牧師、ライカーガス・M・スターキー・ジュニアは、かけ事について、次のような言葉で警告を発している。すべての末日聖徒は、彼の言葉を、自分の教会の教えと考えてもよいだろう。

「隣人に対する善良なキリスト教徒の愛というものは、キリストのような者になりたいと願う人間の霊の成長を妨げたり、社会における正義の構築に水を差したりするようなあらゆる行為に反対するものである。キリスト教徒は、自らも、かけ事をするのではなく、いかなる形でも公のかけ事を是認することはないのである。それは、かけ事が、啓示されたイエス・キリストの福音にある、人生の計画にとって有害であることを知っているからである。」⁹

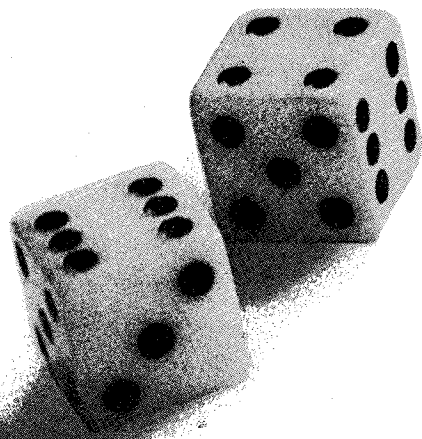
かけ事の第三の害悪は、かけ事に参加する人をだめにしてしまう傾向があるという点である。私たちは、信任の厚い経営者が、従業員の金を無断で使って、自分の生活に破綻をきたし、自分と家族に、恥辱と悲劇をもたらすという事例に何度も接しているはずである。こういったあさましい話のもとをたどって行けば、必ずと言っていい程かけ事の借金を支払ったり、さらにかけ事ににつき込むための金策に奔走したりといった、捨てばちな行動に行きつくのである。

かけ事をする人には、これ程強い誘惑がつきまとうため、政府や企業の高い地位にある人々は、かけ事していると評判のたっている人を採用したり雇っておくようなことはしない。さらにかけ事の望ましくない影響を詳しく論ずるなら、もうひとつ注目しなければならないことは、かけ事には、しばしばアルコール中毒やその他の悪が付き物であるという事実である。

第四の害は、かけ事の道徳的影響には関心を持たない人々の意見であるがかけ事には驚く程時間の浪費が伴うという点である。かけ事に時間を浪費するような人々は、家庭のことや仕事を犠牲にしてもそこに出处けているのである。

かけ事にふける数多くの人々がその泥沼から抜けられなくなることを考えるとき、かけ事で浪費した時間が一層重要なものとなってくる。十二使徒評議員会のリチャード・L・エバンズ長老(1906—1971)は次のように言った。

「かけ事の本質は、その漸進的な性質にある。普通、かけ事は穏やかに始



まる。だが、やがて他の冒険的な趣味と同じように、しばしば、抜き差しならないものになってくる。良くて、時間を浪費し何ら生産的なものをもたらさない。しかも最悪の場合は、かけ事に取りつかれて、頹廢的になり、いつでも何もせずに関わることができるといふ愚かな考えに陥って、偽りの生活が続けることになる。」¹⁰

最後に、かけ事を非難する第5の根拠は、前述の他の害悪から出て来るものである。私たち末日聖徒が、主のみたまのささやきに調和しないような行為をしているとき、私たちはいつも莫大な代価を支払っているのである。私たちがみたまの力強い影響を受けずに取り残されるなら、容易に誘惑を受け他人を批判する習慣に陥り、世の勢いと悪しき者の業にもあそばされ、打ちめされることであろう。

かけ事が、それに参加する人の霊的感受性を鈍らせることに異論はありえない。こうした恐ろしい結果を見てみると、私たちは、かけ事のもつ極めて広範で邪悪な影響を知ることができる。十二使徒評議員会のジョン・A・ウィットソー長老（1872—1952）は、こうした考えを次のように明確に述べている。

「かけ事に興じ、運に頼って歩む人々は品性の墮落を招くであろう。霊的な無気力状態に陥り、健全な社会の敵となるであろう。とばく部屋は、いかに装飾を凝らしてはいても、地上で最も醜悪な場所である。神経をとぎすまして参加している人々は、全くの沈黙に終始し、聞こえるものと言えば、テーブルの上にある、暗黒の翼の羽ばたきのみである。そこには、知られざる悪の、恐ろしいまでの影響が絶えずたち込めている。これこそ悪魔の家以外の何ものでもない。」¹¹

これまで私がかけ事について述べてきたことは、当然、トランプ遊びに金をかけること、競馬やその他の運動競技に金をかけること、あらゆる種類のとばく、富くじ、ばくちにも共通していることである。

また、さらに申し上げたいことは、かけ事と同じ影響力、すなわち状況の変化に頼る無謀なかけの要素が、ある種の投資にも見られることである。金をかけてさいころを振るときの悪と同じ悪が、ひどく投機的な株や生活必需品の思わく買いに自分の金を不用意にかけ人々にも伴うのである。私は、この分野に関して、ジョセフ・F・スミス大管長の助言以上に素晴らしい助言を知らない。スミス大管長は次のように言っている。

「偶然の要素は私たちの従事するすべてのことに非常に広く入り込んでいる。従って私たちが物事をする時の精神が、ばくちをするか、合法的な仕事をするかのいずれかを決定している、ということ覚えておくべきである。」¹²

これまで教会の指導者によって強く非難されてきたかけ事のひとは、トランプ遊びである。無論、金をかけなくとも、トランプ遊びはできる。だがトランプ遊びとかけ事の関係は背中合わせの間柄であり、しかもトランプ遊びをすること自体が、かけ事にある有害な要素を数多く含んでいる。そのため、それがかけ事につながろうとつながるまいと、非難の対象となっているのである。

ウィットソー長老は、トランプ遊びが習慣になりやすく、時間の浪費であるという理由で、これを非難した。ウィットソー長老は次のように言っている

「かけ事の本質は、その漸進的な性質にある。普通、かけ事は穏やかに始まる、だが、やがて他の冒険的な趣味と同じように、しばしば、抜き差しならないものになってくる。良くて、時間を浪費し、何ら生産的なものをもたらさない。しかも最悪の場合は、かけ事に取りつかれて、頹廢的になり、いつでも何もせずに関わることができるといふ愚かな考えに陥って偽りの生活が続けることになる。」

リチャード・L・エバンズ



「トランプ遊びに興じたとして、何も変わったことはないし、新しい知識や考えや計画も浮かんでは来ない。新しい希望も抱負も生み出したことがない。ただ次々に貴重な時間を浪費するだけである。どこにも行きつくことがなく袋小路に追い込まれるようなものである。」

ジョン・A・ウィットソー



る。

「これまでの長い間の経験からわかってきたことは、トランプ遊びの習慣は、人をその泥沼に追い込み、トランプなしには一日も過ごせないと感ずるようになるまでその中に引きずり込むことである。

トランプ遊びに興じたとして、何も変わったことはないし、新しい知識や考えや計画も浮かんでは来ない。新しい希望も抱負も生み出したことがない。ただ次々に貴重な時間を浪費するだけである。どこにも行きつくことがなく、袋小路に追い込まれるようなものである。……新しい、次々に増大する知識と力の急激な流れに自分を即応させようと努力しない人々は、退屈で味気ない生活を送ることになる。時間に関して言えば、『時勢に遅れずについて行く』という態度が必要である。私たちは、魂を飢えさせるような娯楽のために、あえて時間を浪費する必要はない。」¹³

かけ事を合法化しようという要求が、非常な勢いで一般化し、説得力を持つようになって今日、私たちは、さらに強く決意を固める必要がある。私たちは皆、市民としての影響力を駆使し、何か社会事業を振興するための手段としてかけ事をするのなら、その害悪も止むをえまいとして進められるあらゆる試みに対抗しなければならない。私たちは、また、教会の指導者の勧告にも耳を傾けるべきである。教会の指導者は、「いかなる形のかけ事であれ常に反対」しているし、私たちが自らは世の汚れに染まらずに、身を清く保てるよう、絶えず勧めているからである。

(注)

- 1) 「編集者のページ：かけ事」インブループメント・エラ 第29巻(1926年9月号) P.1100
- 2) ヒンズー教典、ヒンズー教：インドに発生し、インド固有の宗教、哲学、文化活動を生んだ特異な宗教
- 3) コーラン：イスラム教の教典
- 4) タルムード：古代ユダヤの律法学者の書物を集めたもの。伝統的なユダヤ教徒の宗教的権威の基盤をなすもの。
- 5) アリストテレス：(384—322 B. C) ギリシャの哲学者
- 6) フランシス・エメット・ウィリアムズ「富くじ、法律、道徳」[英文](ニューヨーク、パンティジ社1958年版) P.26, 27
- 7) ジョセフ・F・スミス「福音の教義」第1巻 P.252
- 8) スティーブン・L・リチャーズ「知恵はどこに」[英文](デゼント出版社1955年版) P.54, 55
- 9) ライカーガス・M・スターキー「キリスト教徒とギンブル狂」から、「かけ事」、ロバート・D・ハーマン編[英文](ニューヨーク・ハーバー・アンド・ロウ社1997年版) P.232, 33
- 10) 「運に頼る」インブループメント・エラ第49巻(1946年2月号) P.793
- 11) 「末日聖徒はトランプ遊びをしてもよいか」インブループメント・エラ第43巻(1940年4月号) P.225
- 12) 「福音の教義」第2巻 P.64
- 13) インブループメント・エラ 第43巻(1940年4月号) P.225

子供はしばしば私たちに大事なことを教えてくれる。私は日記を読んでいてそのことをまた痛感した。1972年1月28日付の2歳の息子について書かれている箇所をあげてみよう。

「マッシューから教えられた。今晚マッシューがベッドで泣いていた。私は理由もなくそうしているのだと思った。何回も私の所へ来ては鼻をかんでくれるか、鼻をかんでいる間ちり紙を押えていてほしいと言った。3、4回そんなことがあってから、私はマッシューの部屋へ行って「お尻をおたれたいのか」と聞いた。マッシューはうなずいた。私は腕を振り上げてもう一度聞いた。マッシューは「はい」と言った。そのとき急に私は、マッシューが私を信じ切っていて、お尻をおつことで問題が片付くと私が考えるならそうされたいと思っていることに気づき、固い心がほぐれた。それからマッシューを少しの間抱いてゆずってやったが、マッシューは風邪のひき初めで鼻がつまっていることを知り、心はもっと和らいだ。マッシューはそれで不快だったのだ。私はマッシューのベッドにちり紙を持って行き、好きなだけかむうよにと言った。マッシューは、「ありがとう」と言った。私は罰を受けたような気持ちで帰ってきた。」

2歳の子供がベンジャミン王の説教を改めて身をもって示してくれたのである。

「肉欲に従う人は神の敵であって、アダムの墮落してこの方そうである。しかし、人がもし聖霊の導きに従い肉欲に従うことをすてて主キリストの身代りの贖罪に由って聖徒となり、幼児のように従順で柔和で謙遜で忍耐で愛情に富み、幼児がその父に従うように、主が負わせたもうすべてのことに喜んで服従しないならば、とこしえに神の敵となるであろう。」（モーサヤ3：19）

明らかにマッシューのような子供たちはベンジャミン王の言った従順を実行し始めている。しかし私たちはよく間違っていて、子供を自分に従わせようといっしょうけんめいになる。ベンジャミン王が私たちに言っていることを忘れていているのである。子供が生まれながらに持つ主イエス・キリストへの従順を、私たちはどのようにして他へ転化させているのだろうか。子供が救い主に従順に従うには、どのように導いたらよいのだろうか。

私たちがこの問題を、救い主に導かれる家系、すなわち私たちのあとに続く家系に子供たちを組み入れる一助とみなすとき、家族を立派に導くことにきっと成功するであろう。

従順な家族

ヘンリー・B・アイリング

かつて従順であった子供が従うのをやめるのはなぜであろうか。それは、信仰を失うからである。もし子供が家系の先頭に救い主が働いておられることを知ったり、救い主がおられるという確信を持つならば、従おうと思うであろう。その道が必ず幸福へと続くからである。従順は信仰の行ないであり、従うことをやめるのは信仰喪失の証拠である。

成長したマッシューは、いつか私が「友だちが皆そのような服を着ても、おまえは着ないほうがいい」と言うとき、私を冷ややかに見つめるであろう。ああ、それはマッシューにとって何という信仰の試みであることか。彼はお尻をおたれようとしたように、そのとき洋服を着換えようとするだろうか。私にはどうにもできないことがあるが、しかしいくらかは私の力にかかっている。私たちは子供を完全にコントロールすることも、子供に振りかかる出来事を皆コントロールすることもできない。しかし私たちは自ら次の3つの態度を取ることにより、従う信仰を養うことができるのである。

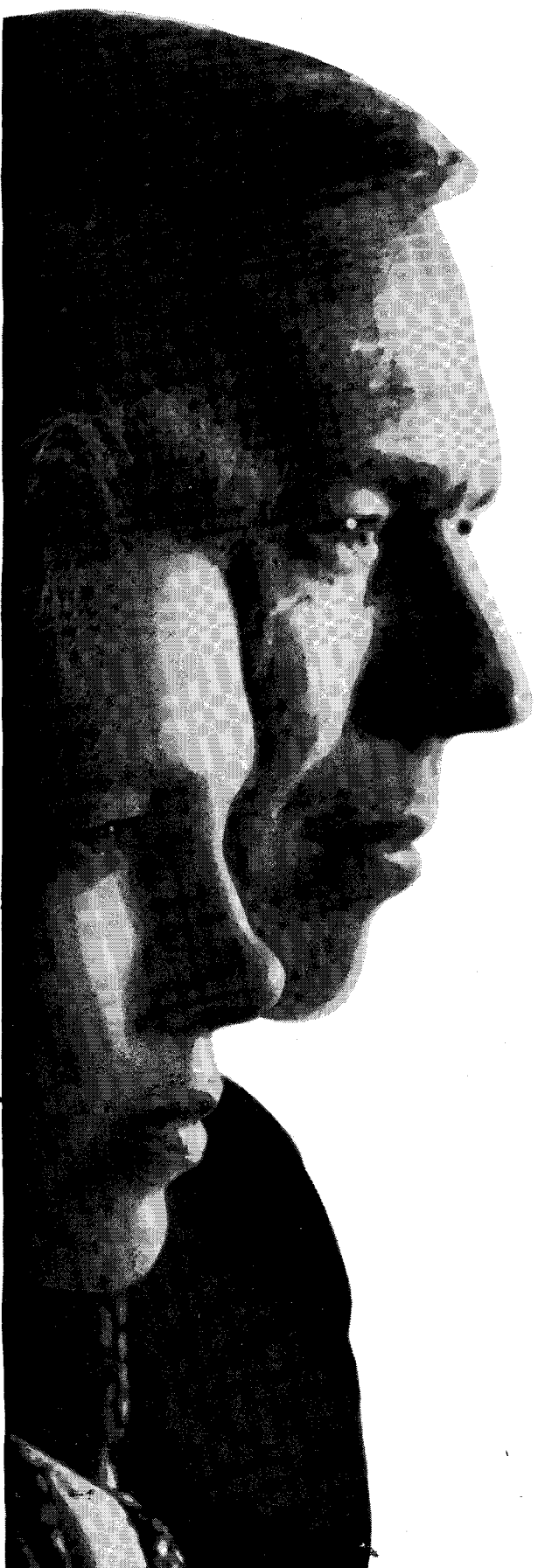
第一に、私たちは祈りと聖典によって子供を救い主に親しませることができる。子供たちは実際に目で家族を導く救い主を見ることはできないが、救い主の存在を感じることができる。それには、単に祈りの方法を教えたり聖典を開いたりする以上のことをしなくてはならない。

家族の祈りや個人の祈りのひとつの目的は、子供たちが霊的経験をするようにと願うことでなければならない。寝る前の祈りや朝晩の家族の祈りがいかに大切であるかを息子のヘンリーが初めて悟ったのは、6歳で10キロ離れた知らない町で迷子になったときのことであった。ヘンリーは泣き叫び、走りまわって、絶望して茂みに駆け込み、祈ろうとした。あとになって驚きの声で言うところによると、「お祈りしようとしたとき、ふたりの人が来てどうしたのって聞いたの」という。ヘンリーは1時間後に家に戻った。

天竺葵 創作

マキトマ・田・一・リ・ハ





すでに従順でなくなっている子供のための霊的経験を、両親も得ることができる。不従順な二代目アルマに現われた天使のことを思い出していただきたい。天使は言った。

「見よ、主はすでにその聖徒らの祈りも神の僕である汝の父アルマの祈りも聞きとどけたもうた。汝の父は汝に真理を知らせようとして堅い信仰をもって汝のために祈った。それであるから、神の僕たちの祈りがそれぞれの信仰に応じて聞きとどけられるよう、われは神の権能と威力とを汝に認めさ



せるために来たのである。」(モーサヤ27:14)

私たちは、子供が霊的な確信を感じ、聖典や救い主を身近に感じるようなやり方で一緒に聖典を読むこともできる。マリオン・G・ロムニー長老はブリガム・ヤング大学での説教で、息子といっしょにモルモン経を読んだときのことについて話をした。

ロムニー長老は言った。「私たちはニーフアイ第二書の最後のすばらしい3章を交替で声を出して読みました。息子の声が途切れるので風邪をひいているのだと思いましたが、そのまま3章全部終りまで読みました。

読み終わると息子が言いました。『パパ、パパはモルモン経を読んでいて泣いたことがある?』

『うん、あるよ』私は答えました。『ときどき主のみたまがモルモン経は真実だとパパの心に証するので、パパは泣いてしまうんだよ。』

息子は言いました。『じゃあ、きょうぼくもそうだったんだね。』」

私たちが子供たちだけとの時間を作り、3章を読むだけの時間をとって、心から「そうだよ、私も泣くことがあるよ」と言えるならば、このことは私たちの子供にも起きるのである。

子供の世界で私たちにコントロールできる第二のことは、主に奉仕しているときの幸せで楽しそうな姿を子供に示すことである。それは、子供が従うかどうかを決めるときに影響を及ぼす。救い主の荷は本当に軽いのだろうか。奉仕は楽しいのだろうか。このような疑問は、私たちの顔や声や行動におそらく長い長い安息日の終りや疲れの重なったとき、悲しいときに、子供に対して答えられるのである。

私は父が「理解を生じる平安」について説教しているのを聞いたことがない。しかし家族いっしょに教会のすべての集會に出かけるときの父の笑顔に、私はそれを感じ取った。もし父がいやな顔をしたなら、それは私たちが行こうとしているからではなく、私が支度に手間取っているからなのである。行かないなどということを私は一度も考えたことがないように思う。なぜなら行かないのを見たことは一度もなかったからである。また私は、母が亡くなって1時間後に病院を出たときの父の顔に、その平安を見た。父は私を残して病室に戻り、看護婦や、医師たちに自分のことよりも深い関心を示してお礼を述べた。父は言わなかったが、私は、救い主に信頼しているために父の重荷が軽いことを知ったのである。マシューが私を信頼したと同様に。

マーク・E・ピーターセン長老の質問は、私たちが自分自身で喜んでいない奉仕を子供たちに勧めることの矛盾を説いている。

「もし両親がやましきのない良心の喜びを知っていないならば、子供にその喜びを教えることができようか。

もし両親が正直に什分の一を納めることの満足を感じていたことがなかったならば、子供の心にこの律法への従順の種を播くことができようか。

もし両親が安息日を聖く保つことの真の価値を見いだしていないならば、子供に安息日を尊べと教えることができようか。

もし両親が清い生活の何であるかをつかんでいないならば、家族に清い生活を説き教えることができようか。

もし両親が神殿に入っていないならば、子供に神殿結婚のすばらしさを教えることができようか。

もし両親自身が福音に充分改宗していないならば、自分の子供を立派に改宗させることができようか。」(「生活の信条」(英文)ブッククラフト社、1959年、P.112—13)

私たちにコントロールできる第三番目は、キリストは従順な人を導かれるという信仰を強めるような経験の子供にさせることである。この信仰を持てば、神の導きを求めたあとで明らかに意にそぐわないことを命じても、父が正しいのかもしれないと信じることがな容易であろう。父リーハイはニーファイの教育について立派な模範を示した。ニーファイはモルモン経の最初の章で、「私すなわちニーファイは善い父母から生れたので、父の知っていたすべての学問の中からいくらかの教えを受けた。……」(Iニーファイ1:1)と述べている。しかし父リーハイはこれよりはるかに大きなことをした。リーハイはニーファイに、神が危険と困難のただ中にあっても小さなことにおいても従順な男女を導かれることを知る機会を与えたのである。彼は息子たちをレーバンの真ちゅう版を取りにエルサレムへ戻した。ひとりニーファイだけが、危険な使命を果たして、救い主の導きを身をもって学んだ。ニーファイはこのように言っている。

「時はもう夜であったから私は兄たちを城壁のそとのところに忍ばせ、兄たちが身をかくしてから、私ニーファイはただ一人、都の中へ忍びこんでレーバンの家の方へ進んで行った。私は何をせねばならぬのか、前以てそれを知らずにただひとすじに『みたま』に導かれて行った。」(Iニーファイ4:5, 6)

ニーファイは版を手に入れ、兄たちと共に無事に父母のもとへ帰った。子孫にとって聖典となる版は大きな恵みであったが、リーハイは息子のニーファイにそれ以上に貴重な経験をさせたのである。ニーファイは「幻に耽る人」(Iニーファイ2:11)を信じて彼に従った。なぜならニーファイは救い主が本当に導いておられることを知っていたからである。

私たちはこの経験の結果、家族を導くリーハイの上に祝福がもたらされたことを知る。リーハイの一行が荒野で苦しんだとき、リーハイは子供たちの信仰を保つ上で大きな困難に出合った。そのひとつは、ニーファイが自分の弓を折ってしまい、飢えの恐れからリーハイの家族のある者たちが再び反抗心を起こしたことであった。ニーファイは自分で弓を作った

が、すぐに食糧をとりに行くことをせず、父のところへ行き「どこへ行って食物をとろうか」と尋ねた。ニーファイはこう記録している。「父は主にお伺いをした。」(Ⅰニーファイ 16:23, 24)

ニーファイは父に従順であった。その理由のひとつは、神が人々や家族の細かいことにも祈りに答えられると確信させた、それまでの経験にある。リーハイは賢明にも、自分でそのことを知ることのできる経験をニーファイに与えた。子供には、自分から神に導きを求めなければならないような責任を与えることができる。子供はそのような経験によって、同じようにして神の助けを求める父親に確信をもち、安心して従うことができるようになる。

ある父親が主に助けを求めてから、別の町での仕事を引き受けるという決定を下す前に家族全員を集めた。彼は家族に引っ越しをどう思うかと尋ね、どうするべきかについてそれぞれひとりで主に祈って答えを受ける機会を与えた。家族は祈ったあとで、父親と同じように引っ越すべきだという靈感を感じた。この父親は家族にも自分が受けた霊的な答えを得る機会を与えたために、家族は父親の言うことを信じて従うことができた。

子供を私たちに従うようにすることがむずかしいのと同じように、妻が私たちのリードに従うように助けることもむずかしい。多くの妻が立派な能力や信仰や力を持っているが、主は教義と聖約の中で、予言者の妻エマも私たちの妻も従うべきであると言っておられるように思われる。主は言われる。「たえず優しき心をもち、たかぶりを警めよ。彼を夫に持つことと、その夫に来るべき光栄とを汝悦べ。」(教義と聖約25:14)

強い女性はこれをどのように受け入れることができるだろうか。教義と聖約はこの疑問に答えていると思う。

「如何なる権力も勢力も、神権によりて維持する能わず、または維持すべきものにあらず、ただ説服と堅忍と柔和と温情と偽らざる愛とによる。また親切と浄き知識すなわち偽善にあらず奸智にあらずしてその人を甚だ大いならしむるものによる。」(教義と聖約121:41, 42)

これほどすばらしい結婚の手引は見つからないであろう。偽らざる愛により説服と親切と堅忍を行使する指導者には、いかに能力や信仰や力にすぐれた女性でも確信をもって従うことができるであろう。

また神権を正しく行使するときにはこうであるとも言われている。「……然る時は、汝の自ら信ずること神の前に強くなりて、神権の教理は天より下る露の如くに汝をうるおさん。聖霊は常に汝の伴侶となり、汝の笏は真理と正義の変ることなき笏となり、汝の支配は永遠の支配となりて強いらるることなく永遠に汝に流れ込まん。」(教義と聖約121:45, 46)

私たちの多くにとって子供たちや妻の信仰を勝ち得るためには心を入れ替えることが必要であると同様に、耐える勇氣が必要である。偉大な親たちでさえ、ときには家族の者から信じられなくなる。父リーハイはこの失意に耐えた。しかも彼はそのようなことを前から警告されていたのである。夢の中で、リーハイは福音の甘い実を自分と同じように取って食べよと家族を招いたが、レーマンとレミュエルは来なかった。たいていの人はこのような夢を見れば、心がふさぎ、導こうとするのをやめるはずだが、リーハイはそうではなかった。リーハイは臨終の前に全家族に教えを施し、イエス・キリストに従うように勧めた。彼の言葉の中でも最も印象的なのが、家族に対する話の終り近くに出てくる。この言葉である。「わが息子たちよ目を覚め。そして義のよろいを着よ。お前たちを縛っている鎖をふり切りかくれた暗い境遇から出てちりとあくたから立ち上れ。」(Ⅱニーファイ1:23)

息子たちが自分に従ってほしいというこの父の望みは、リーハイの一生の数年間およびレーマンやレミュエルの反抗だけを見るときに、悲しい結末を迎えたように思われるかもしれない。しかしその望みは、リーハイの子孫すなわち現代のレーマン人にそそがれる大きな祝福の中に、今や実現していると言えよう。リーハイが耐え続け、救い主に従うように招くことを決してやめなかったことで、今日の子孫にもまだリーハイの手が及んでいるのである。そのうえ幾千の人々が福音を受け入れ、正しい子孫を育てている。それはリーハイの子孫である。

私たちは子供たちすべての完全な従順を期待はできない。しかし家族の間に、キリストが生きておられ、キリストへの奉仕は喜びであり、キリストは従う人々に話しかけられるという信仰を養うことができる。従順な子供は主の御声を聞き私たちが救い主に従う限り、私たちに従ってくるであろう。

アイリング博士は、アイダホ州レックスバーグにあるレックス・カレッジ学長で、レックスバーグステーク部高等評議員である。

大いなる背教

エウセビオスの観覧

ハイド・M・メルル

「私たちが今日
得ている
後世の知識をもって、
17世紀という期間を
さかのぼって見るとき
私たちは、
エウセビオスが
初期の教会に
背教や異端があったことを
非常に頻繁に指摘しているので、
驚嘆するばかりである。」

歴史の中で最も魅力に富んだ時期はキリスト紀元のごく初期の時代である。この時期は末日聖徒にとって、この上なく意義のある時期であるが、そう感じられない人がいるとすればそれは無知のためにはかならない。その頃、主が在世当時設立された教会の運命を、明らかに、特に悲劇の様を生き生きと描いた歴史家が何人もいた。初期のキリスト教徒で歴史家であったエウセビオスは、大いなる背教の兆しを実際に目にし、書き記している。この兆しはやがて大いなる背教に発展し、福音の回復が必要となるに至ったのである。

エウセビオスは、紀元260年にガラヤ湖の西南方、地中海沿岸の港町カイザリヤで生まれた。彼は若い頃から学者として傑出していた。宗教的な見地を理由に、309年、311年と2回にわたって投獄されたが、314年にカイザリヤの監督になっている。そこでエウセビオスは、パンフィラス（カイザリヤの祭司、309年2月16日殉教）の立てた大きな図書館で勉強することができた。またエルサレムの図書館も利用することができた。エウセビオスは、徹底的にしかも正確に書く人であったが、その著書は46冊以上にも達している。彼は、尊敬してやまないコンスタンティヌス皇帝、しかも自分がバプテスマを施した皇帝が死んで2、3年たった339年または340年に死んでいる。エウセビオスの主要著書の中には、10巻からなる「教会史」がある。これは326年に入る直前に書き上げられたものである。この書の中で彼は、使徒の死以降コンスタンティヌスの勝利に至るまでの間に教会の中で起こったいろいろな出来事を記録している。

モルモニズムの特色のひとつは、キリストの父なる神とこの地球との関係についての独特な概念である。例えば、旧約聖書の神エホバ、すなわちイスラエルの神が実際はイエス・キリストであったとする知識がそうである。エウセビオスもこのことを知っていたが、その後、神会の本質について広く混乱が生じて以来、この知識はすっかり失われてしまった。エウセビオスは次のように言っている。

「宇宙の最高の主権者であり創造者である神は、最初の子供であり、御自分の次位にあるキリストを信頼して、人の創造についてキリストと語り合っておられる。『神はまた言われた、〔われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り……〕』

この言葉は、ほかの予言者も確認し讃歌の中で神を次のようにたたえているものである。

『神が語った、すると子らが生まれた。

神が命じられた、すると子らが創造された。』

この予言者は、御父であり造物主である御方を、厳然と命令を下す至高の統治者として紹介している。そしてほかでもない、私たちが信仰を告白している御方、すなわち、神に次ぐ位置を占め給う『神なる言葉』を、御父の命に従って仕える御方として紹介している。』¹

「エウセビオスは、キリストが古代の人々に親しく知られていたことを詳細に説いている。」

「しかし、私が既に示したように、

キリストはアブラハムに現われ、イサクに教え、イスラエルに語りかけられ、またモーセやその後の予言者と自由に言葉を交わされたので、彼らが神の御子キリスト御自身を知っていたことは明らかである。……従って当然、最近すべての国々に宣言されているキリストの教えによる宗教は、最初の、最も古い原始の宗教にはかならないと見なければならぬ。この最も古い原始の宗教は、アブラハムが神すなわちキリスト、『神の言葉』によって宣言された神託によって明らかにした宗教である。この『神の言葉』はアブラハムに御自身のことを示されたのであった。²

このキリストの概念と福音が永遠であるという概念は、末日聖徒の読者にとっては非常に親しみのあるもので、胸を踊らせるものがあり、美しいとも表現できるくらい明瞭である。しかしエウセビオスの翻訳者である、英国教会のウィリアムズンは、今日の人々の無知を次のように指摘している。

「旧約聖書の神の現われは、キリストが（まだ人として生まれていなかったが、人の形で）現われたのだとするエウセビオスの考えは、私たちにとって全く信じられないもののように思える。しかし私たちは一体、人と神が会ったという数々の物語と、これまで神を見た者はひとりもないという聖ヨハネの宣言を、筋が通るように説明できているだろうか。」³

エウセビオスは、キリストの本質と教会をむしろ始め、遂には上記の貴重な知識を失わせるに至った背教の過程を明解に記している。

「アラビヤのポストラの監督であるベリラスは、教会の真実の教義を曲げ

キリスト教の信仰とは異質の概念を導入しようとした。そして私たちの救い主なる主は、人々の間に住みたもう前に、主の姿をもって存在されたことはないし、自身では神性を備えておられなかった、ただ御父の神性が彼の中にとどまっただけであると主張した。」⁴

神権の職のうち、異邦人は言うに及ばず多くの末日聖徒までが誤解しているものは、七十人の召しである。エウセビオスがこの召しの機能を本当に理解していたかどうかは、判然としない。ただ彼は、個々の例として、あるいは全体的に取り上げる場合もあるが、七十人についてしばしば触れている。

「ユダの空席を埋めて使徒の職に名を連らねたマッテヤも、くじを引くときに同じく推薦されたもうひとりの弟子も、以前に七十人に召されていた。タダイもそうであったと言われている。……七十人以外にも救い主の他の弟子がいた。」⁵

エウセビオスは、「七十人のひとりであるタダイ」が救い主の十字架の後伝道し、いやしの業を行なったすばらしい話を引用している。またそこで、七十人の召しがほとんどの原始教会で定められていた職であったことと、この役職が主から遣わされた1回目の伝道（ルカ10：1－12参照）で終わってしまったものではないことを示している。

エウセビオスは、七十人について書いたアレクサンドリアのクレメンス（紀元150—215年、ギリシャのキリスト教徒で、神学者であり、教育家でもある）の文を引用している。

「義人ヤコブ、ヨハネそれにペテロは、主の復活後、主から高度の知識を

授けられた。3人はそれを他の使徒に伝え、他の使徒はさらに七十人に伝えた。その中にバルナバもいた。」⁶

私たちが今日得ている後世の知識をもって、17世紀という期間をさかのぼって見るとき、私たちは、エウセビオスが初期の教会に背教や異端があったことを非常に頻繁に指摘しているので驚嘆するばかりである。その中の極めて有害な教えのひとつに、人は独身を通すべきであるという教えがあった。

「〔アレクサンドリアの〕クレメンスは、……結婚した使徒のリストをあげている。クレメンスは、結婚を非難する者のためにこのリストをあげたのである。彼はこう言っている。『使徒たちをも非難するというのだろうか。ペテロにもピリポにも子供があったしピリポは娘たちを結婚させている。事実パウロは、何らはばかりことなく自分の妻に手紙を書き送っている。パウロが妻を連れて歩かなかったのは、伝道をしやすくするためであった。』」⁷

またこのようにもクレメンスを引用している。

「祝福されたペテロは、妻の死に臨んで、妻に神の召しが来て、天の家に帰っていくのを喜んだ。そして妻の名を呼び、励ましと慰めの気持を込めて『主を忘れないように』と語った。祝福された人の結婚と、最愛の人に対する至上の感情は、このようなものであった。」⁸

エウセビオスは、リヨンの監督イレナエウス（紀元130—200年、ギリシャ教会の父）の文も引用している。

「……エンクラティス派と呼ばれる人々は、結婚を禁じ、古代の神の計画を拒んでいた。同時に人類を住まわせ

ることを目的とされた男女の創造主を無言のうちに非難していた。…彼らは始祖が救われないとも主張していた。このはなはだしい瀆神は、タティアノスが最初に提議して導入されたものである。彼は、もともとジャスティン（ジャスティン・マーター、AD 100—165、殉教したキリスト教徒）の弟子であったが、師の下に出入りしている間は、一步もこの種のことを口にしなかった。しかしジャスティンが殉教するや否や背教に走った。タティアノスは、教師になることを志望するあまり、ますます高慢になっていった。自分が人よりも優秀であると信じて、尊大になる一方であった。自己流の教義を編み出して、目に見えない霊体なるもの（エオン）の物語を広めたり……また、……結婚を腐敗と姦淫以外の何ものでもない⁹と非難したりした。

この文章は極めて興味深いものである。初期の指導者が、独身生活を命じる教義に強く反対したことと、真理からの離反が教会員の中から芽生えつつあったことを示している。

エウセビオスは、教会の中に見られた背教の発生を最も初期の頃から追跡している。第1世紀について、次のように述べている。

「……[ヘゲシッポス (A. D100—130)] は、この時期[救い主と同時代の最後の人が死んだ時代]について描写し、……このときまで教会は清く、汚れのない処女のようにであったと語っている。救い主の福音が示す健全な規範の腐敗を求める者は、もしそんな者がいるとしても、まだ陰気な暗闇の中に低く身をひそめていた。しかし、神聖な使徒職に列する人々が皆、それぞ

れいろいろな形で命を全うして逝ったとき、また個人的に神の知恵を聞くことのできた世代が消えていったとき、神不在の誤った組織が、偽りの悪賢い方法で根をおろしていった。もはやひとりも使徒が生存していないので、彼らは公然と自分たちの偽りの知識を駆使して、真理のメッセージに対抗し始めた。」¹⁰

「後に、外からの迫害が
その^{はこ}矛先を緩めると
教会の中に分裂が生じてきた。」

「しかし、大きな自由が与えられると、私たちの間にある変化が生じてきた。私たちは高慢と怠慢に身を任せるに至り、互いにうらやんだり、虐待したりした。機会があれば互いに争い、言葉の槍や盾を使って応酬するようになった。指導者にいどみ、平信徒は平信徒で党派を形成していみ合った。口で言い表わせない偽善と不和が、悪の極限の姿を取るに至った。」¹¹

そして遂には、コンスタンティヌスの統治下に、クリスチャンであることが安全であるばかりか、分別のある者ということになると、外部の第三者が私的な野心を果たすために巧みに教会に入り込んでくるようになった。

「教会の中に入り込んで、クリスチャンの名前と資質を持っていると称する者が、とても口では言い表わせない偽善を働いた。[コンスタンティヌスは]博愛と良い性質、生きた信仰と真実の人格を備えていたので、クリスチャンであると自称し、キリストを心から愛すると見せかける人々を信頼した。」¹²

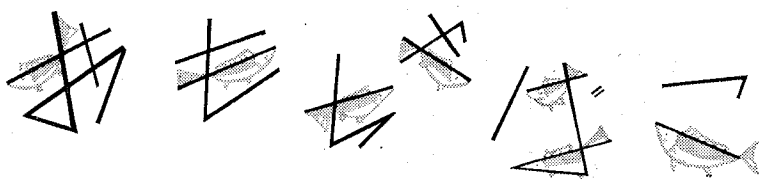
教義がすでにゆがめられ始め、真実の神権がもはや失われた時代に、エウセビオスはその著書に、使徒死後の教会の状態をまのあたりに見るように描写している。偉大な指導者が何人も何人も悲劇的な死を遂げていったこと、異教徒のコンスタンティヌスが非常な影響を与えたこと、それに背教に次ぐ背教の悲しい劇が繰り広げられたことは、皆彼の著書「教会史」に出ている。

以上のことから私は、キリストの教会が徐々に失われていったことと、今日の諸教会が主によって教えられた教義を教えていないことを信じている。エウセビオスの著書は、この主張を支持するひとつの証である。

メルル兄弟は電気技師であり、現在マサチューセッツ工科大学で博士号を取得するために学んでいる。ボストンステーク部、ケンブリッジワード部の会員で、セミナリーの教師である。

注

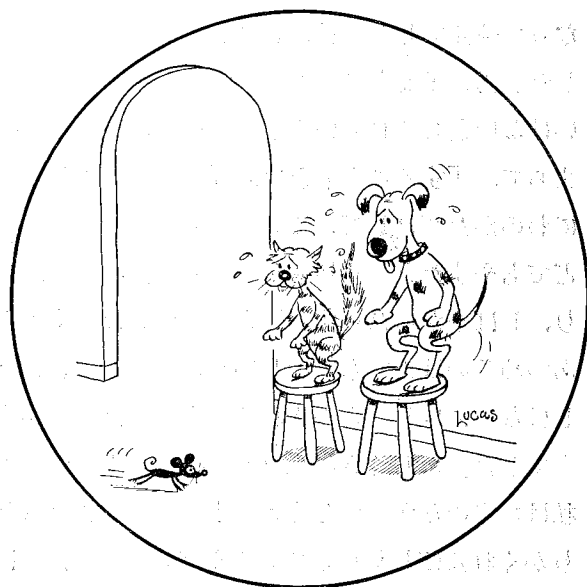
- 1 G・A・ウイリアムスン訳：エウセビオス「キリストからコンスタンティヌスに至る教会の歴史」〔英文〕P.34, 35
- 2 同上、P.47, 48
- 3 同上、P.48
- 4 同上、P.270
- 5 同上、P.64, 65
- 6 クレメンズ、「概説」第8巻〔英文〕ウイリアムスン著 P.72の引用より
- 7 クレメンズ、「雑録」第3巻。コルム・ルイブハイド：エウセビオス、「エウセビオス要義」〔Essenti al Eusebius〕〔英文〕P.115の引用より
- 8 クレメンズ、「雑録」第7巻〔英文〕ウイリアムスン著P.140の引用より
- 9 イレナエウス、異端反駁論第1巻〔英文〕ルイブハイド P.135—46の引用より
- 10 ルイブハイド、P.117
- 11 同上、P.138
- 12 同上、P.208



すうじあそび

マデリン・H・マックウェリ

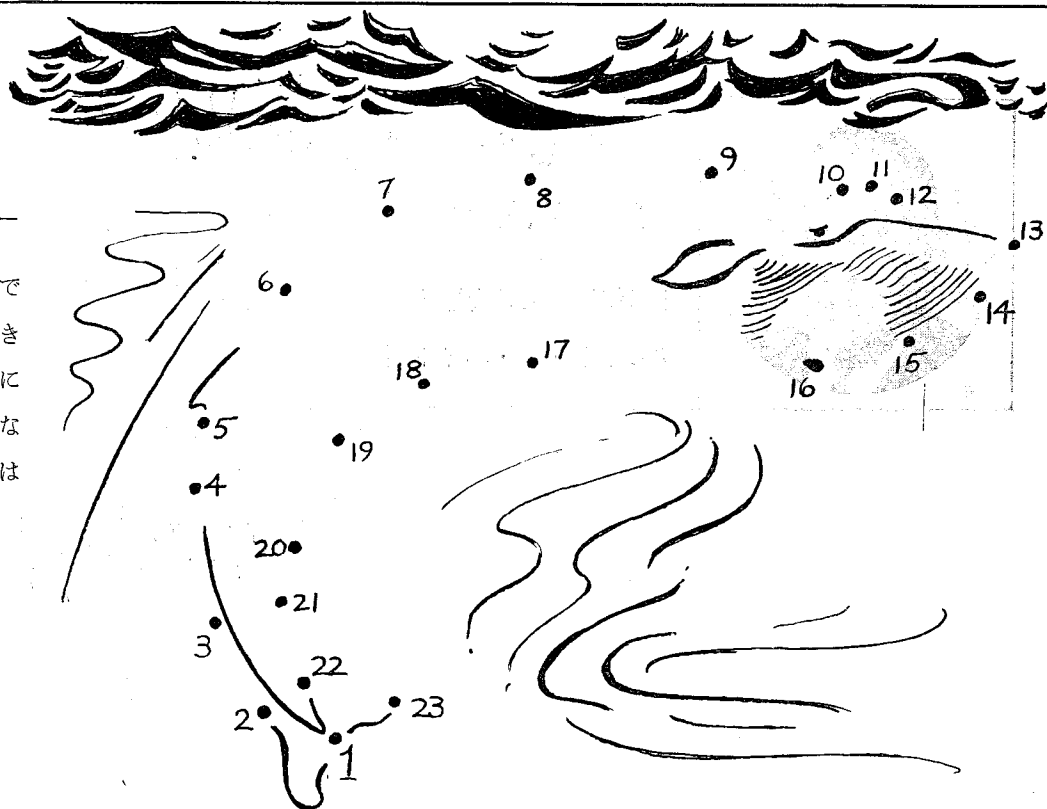
あなたのとしに2をかけて5をたします。それに50をかけて365をひきます。次に1から100までのすうじの中からひとつをえらんでそれにたし、次に115をたします。でてきたこたえの左はじのかず、または左からふたつのすうじはあなたのとしのかずで、のこりのかずはあなたがえらんだすうじをあらわします。



てんせんパズル

キャロル・コナー

うみにすんでいるどうぶつです。水の中にもぐることができますが、1じかんたつと水面にでてきていきすわなくてはなりません。さてこのどうぶつはなんでしょう。



てんせんパズル

私たちのめうし

私のおとうさんは、私が9さいのときにお母さんと私たち子供をのこして死んでしまいました。そこでお母さんは家族をやしなっていかなければなりませんでした。私のお母さんはかしこい人でした。男の子も女の子も何かすることがなくてはいけないとしんじていました。小さなモルモンのまちで、「すること」といえば、いえのまわりやにわのかたづけしごとでした。私のしごとはかまどでもやすたきを切ったり、おちばをあつめたり、しばをかったりすることでした。ほしくさをあつめるのはとてもたのしいしごとでした。わたしはなやにほしくさを入るのをてつだうのがすきでした。ほしくさを入れおえてからともだちと私はなやのなかでほしくさの上をころげまわったりかくれんぼしたりしてあそんだものでした。ほしくさのなかにかくれているひよこのすの中から

たまごをみつけたときなどはどんなにむねがわくわくしたことでしょう。

お母さんは、私たちの生活にはただはたらいであそぶだけでなく、もっとほかにすることがなくてはいけないと思っていました。私たちはいっしょに聖書の中のすばらしい物語を読みました。お母さんは私たちにうたうこと、教会に行くことそしていのことをおしえてくれました。

お母さんは、むすこたちが、「ほんとうのしごと」といわれるものをもつようと、いつも一頭のめうしをかっていました。そのしごとは、まい朝まい晩めうしの乳しぼりと、めうしがたべるほしくさをうしごやに持っていくこと、そしてまい朝まい晩近くの川でめうしを水あびさせることでした。私たちがこれらの仕事をしなければ、めうしはおなかをすかせ、のどがかわくのです。家におそくかえたときなど、私はめうしのせわをしたくないと思ったことがなんどもありました。

ある晩、私が家へかえるとさくがこわれてめう



小さな お友だちへ

十二使徒評議員会補助
デビッド・B・ハイト



しがにげてしまっていました。私はめうしがいそうな場所をぜんぶさがしました。しかしみつかりませんでした。おもいあたるところはみなさがしてみました。それでもめうしはいませんでした。

外はくらくなりはじめ、私はがっかりしてしまいました。めうしがいなくなったのをしたらお母さんはしんぱいするにきまっています。私たちはいえのちかくの人たちにミルクをうっていました。私は、その人たちが私のもっていく新鮮なミルクを待っているようすをおもいうかべました。

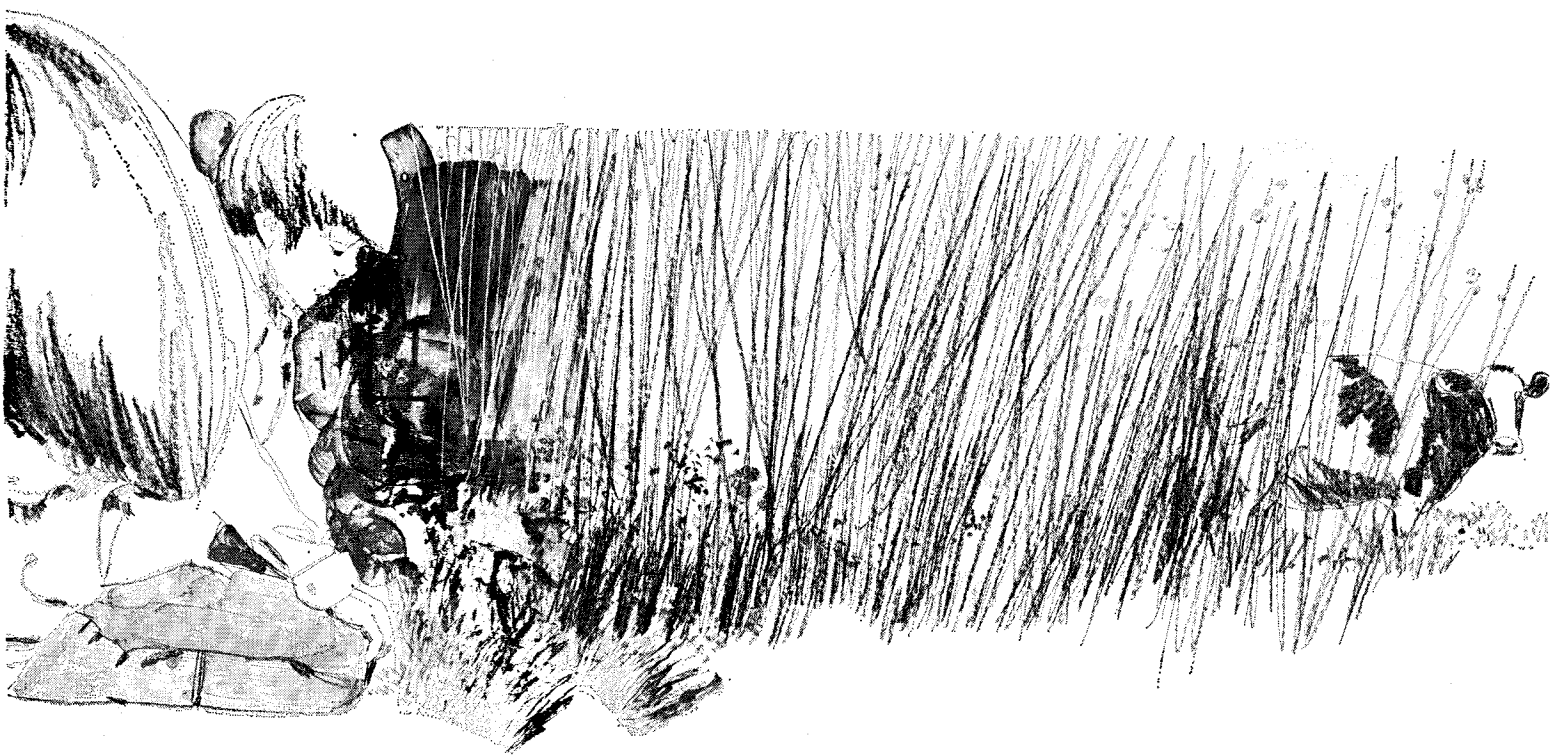
その夜のことはとてもよくおぼえています。私はいのることを教えられていました。そして主にたすけをねがうことができるということを知っていました。運河のそばに小さなしげみがありました。私はそこにぼうしをとってひざまずき、主に私がこまっていることについて話しました。そして主に、私たちのうしがみつかるようにたすけてくださいとおねがいしました。お祈りしたあと、私は運河のどてをあるきはじめました。私がお祈

りした場所からたった2, 3ヤードはなれたところで私はうしをみつけたのでした。めうしは運河のそばにはえているせのたかいやなぎのしげみにかくれていてみえなかったのです。というのは、めうしはやなぎと同じような色をしていたからでした。私はお祈りがこたえられ、天のおとうさまがめうしのいるところへつづく運河のどてを行くように、私をみちびいてくださったことをかんじしました。

私が天のおとうさまにお祈りをするようになったのは、お母さんがまい晩のように私のベッドのそばにひざまずき、お祈りのしかたを教えてくれたからです。

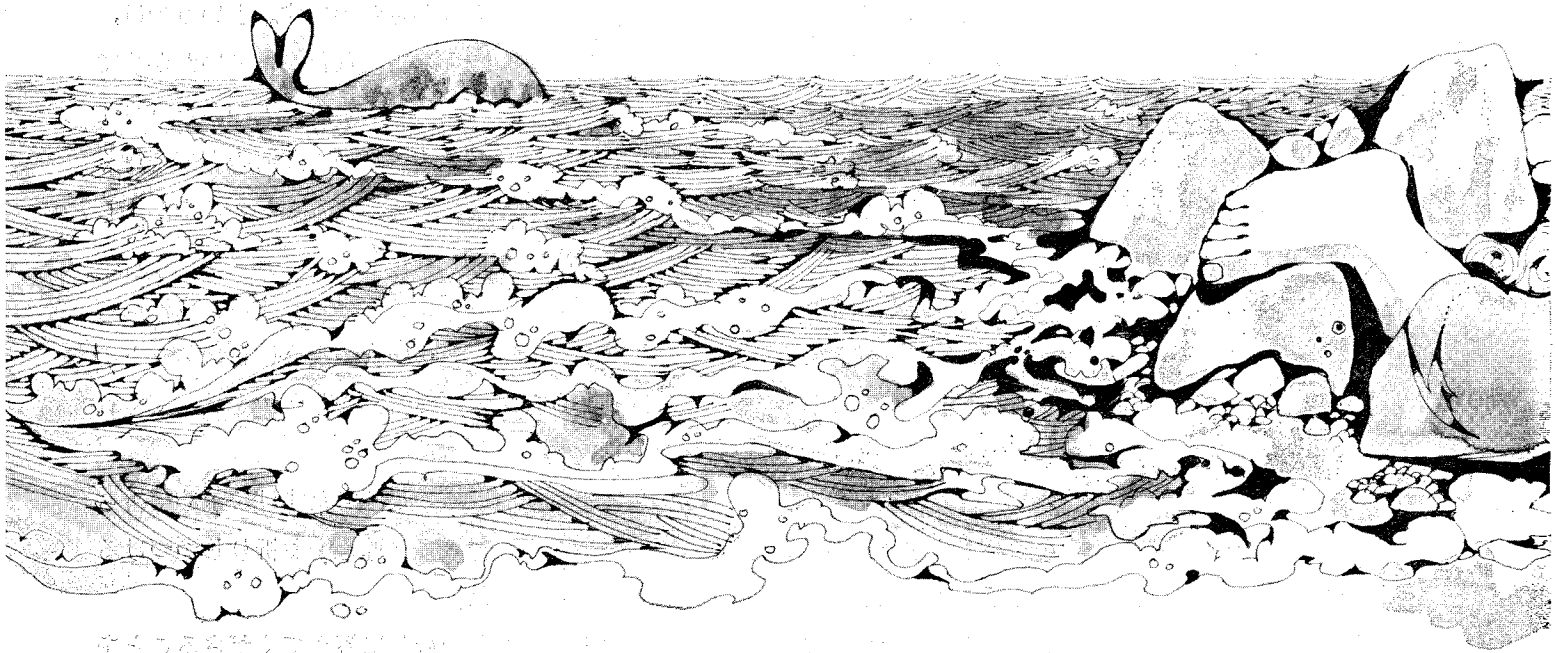
私は小さなしげみのそばでたすけを求めて祈ったあの晩から、神さまの導きをお祈りしつづけるようになりました。

私は主が私たちの祈りに答えてくださることを知っています。



ヨナ

作：メアリー・L・ラスク 絵：ジェリー・ハーストン



主はアミッタイの子ヨナに言われた。「立ってあの大きな町ニネベに行き、けい告しなさい。ニネベの町の人々の悪は見るにしのびない。」

ヨナはニネベの町の悪を知っていた。かれは考えた。「あそこには神を信じる人はいない。私がかれらに福音をとく必要はないではないか。」

そこでヨナはタルシシに行く船にのろうとしてヨッパへ行った。そして主の目をのがれるために船賃をはらい船にのりこんだ。

ヨナは船の自分のへやへ行くと、ぐっすりねむってしまった。かれがねむっているあいだに、主が大風をおこされ、船は波にただよった。水夫たちはおそれて、自分たちの神に波をしずめてくれるようにと祈った。しかし、風も波もおさまらなかった。

しばらく後、船長は、ヨナのところへ来て言った。「あなたの神に祈りなさい。」そして水夫たちはヨナに、なぜこのようなわざわいがやってきた

のか知っているかとたずねた。かれらはかれの名と出身地を聞いたがった。

ヨナは考えて言った。「私はヘブルびとで海と陸とお造りになった天の神、主をおそれるものだ。」そしてヨナは、自分が主の目をのがれようとしたので、主が大風をおこされたのだと話した。

「あなたをどうしたら海がしずまるのか。」水夫たちはわめいた。

ヨナは自分のせいでこのようなことになったので、うれいかなしみ、こう答えた。「私を海に投げ入れなさい。そうすれば海はしずまるだろう。このあらしがおこったのは私のせいなのだから。」

しかし水夫たちはヨナを海へ投げこもうとはせず、どうにかして陸へこぎよせようとしたができなかった。

そこでかれらは、しかたなくヨナを海へ投げ入れた。すると海はしずまった。それからかれらは主をおそれ、主にちかいをたてた。



さて、主は大きな魚にヨナをのませた。ヨナは3日3晩、魚の腹の中にいた。

そのあいだにヨナは祈り、主に従わなかったことをくやみ、どんなことでも主の命令には従うことをやくそくした。

主が魚に命じると、魚は、ヨナを陸にはき出した。主はヨナに言われた。「立ってニネベに行き人々に私の命じたことを言いなさい。」

そこでヨナはニネベの町へ行って、ニネベは40日のうちにほろびると、人々に言った。人々はヨナのことばを聞き、くいあらためた。

神は人々がくいあらためたのを見て、ニネベの町をすくわれた。しかしヨナは神がニネベをほろぼされなかったのを見て不ゆかいだった。

かれはいかって、主に祈り、自分の命をとってくれるようにと言った。かれは言った。「私にとっては、生きるよりも死ぬほうがましです。」そしてヨナは町を出て、町の東のほうに小屋をたて

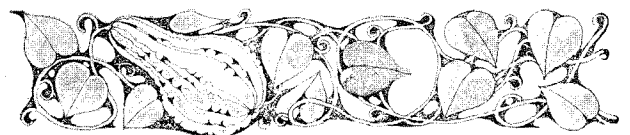
日かげにすわっていた。

主はヨナを暑さからすくうために、とうごまを生えさせ、日かげをつくられた。ヨナはこのとうごまの日かげをよろこんだ。

しかし翌朝、神は虫にとうごまの木を食わせたので、木はかれた。やがて日がのぼると、主は熱い東風を吹かせられた。また、太陽がヨナの頭にてりつけたので、かれは弱りはてた。ヨナは言った。「生きるよりも死ぬほうがましだ。」

神はヨナに、とうごまがかれたのでいかるのかとたずねた。ヨナはそうですと答えた。

すると主は、なぜニネベをほろぼさず人々に大いなる愛を示されたのかを語られた。「あのとうごまはあなたが育てたわけではないではないか。あなたは何の労もつくしていないではないか。あなたが一晚のうちに生え、一晚のうちにかれたとうごまをおしむのならば、どうしてわたしが12万人以上の人々のいるニネベの町をおしまないでいられるだろうか。」



よい 知らせ

作 テルマ・アンダーソン

絵 フィリス・ラック

冷たくこおったツンドラの平原の向こうで、オオカミが1匹ほえていました。その声はひえびえとしずまりかえた空気の中で高くひびきました。それを聞いてイガマックはぞっとしました。すると、もう1匹が前のオオカミにこたえてほえだしたので、イガマックはその声のほうを見ました。

イガマックはしばらくの間その声に聞きいていましたが、急にかたをすくめました。オオカミたちはたぶんトナカイをおっていたのでしょう。でもイガマックはオオカミよりもだいじなことを考えていました。イガマックの家では、赤ちゃんが生まれるところだったのです。兄弟がひとりもいなかったのも、このことはイガマックにとってとてもうれしいことでした。かれはとても弟がほしいと思っていました。

イガマックは家に入ってゆかにすわり、毛布でできたボールを投げて遊んでいました。かれの目は、よろこびでかがやいていました。

おばあさんがお母さんのねているへやからでてきました。イガマックは立ち上がると待ちきれずにたずねました。「赤ちゃん、生まれました？」

おばあさんは首を横にふりました。「うまくいっていないんだよ。おばあちゃんは どうしていいかわからない」としずんだ顔をしていました。



イガマックはおばあさんのこまっ
ている顔を見てしんぱいになってきたの
でできました。「じゃ、お母さんと赤
ちゃんはどうなるの？」

「お母さんはお医者さんに見てもら
わなければならぬんだよ、でも病院
は160キロもはなれているし、お父さ
んはボートででかけているだろう。年
とったおばあちゃんとまだ子供のお前
とでは、どうやってお母さんをお医者
さんのところに連れて行っていいかわ
からないんだよ」とおばあさんがいい
ました。

イガマックは何もいわずにおばあ
さんの顔をじっとみつめながら立って
いました。「飛行機だよ、おばあちゃん/
飛行機ならお母さんを病院につれて行
けるよ」とかれはこうふんした声でい
いました。

「そうだね。飛行機ならこられるね。」
おばあさんが言いました。「でも、ど
うやって飛行機に知らせるんだい？
ここにはむせんはないし、いちばん近
いのでも3キロもはなれた市場にある
んだよ。おばあちゃんはお母さんをひ
とりのこして行けないし、もしおばあ



ちゃんが行ったとしても、市場につけ
るかどうかわからないよ。お前はまだ
小さいからひとりじゃ行けないね。」

「ぼく行けるよ、おばあちゃん」と
まじめにイガマックは言いました。

「ぼくが行ってデリーさんに飛行機を
送ってもらうよ。」

「でも、道がわかるかい？外はとて
もさむいし、今は夜が長い時期なんだ
よ。お日さまはすぐしずんでしまうん
だよ」とおばあさんがいいました。

「道はわかるよ、ぼく。」イガマック
はこうこたえて、毛皮のぼうしをかぶ
り、てぶくろをはめました。

「おまえはゆうきのある子だね。お
前が行くのが正しいのかもしれない。
ほかにはだれもいないんだからね。」
おばあさんがいいました。

イガマックはさよならをいって家を
出ました。冷たい空気にあたって、は
なはひりひりしました。足の下では雪
が小さなハツカネズミのようにキュー
キューになりました。イガマックは、雪
がふきよせるたびによろよろしながら

も、とおい市場をめざして足をはやめ
ました。やがて家のあかりが見えなく
なって、イガマックはひとりっきりに
なってしまいました。イガマックのす
がたは、くらいひろびろとした白い大
きな世界の中にたったひとつの小さな
点のように見えました。イガマックは
つかれるまで走りました。つかれると
歩き、つかれがとれるとまたつかれる
まで走り、また歩くといったちょうし
ですすみしました。

とつぜん、イガマックは2匹のオオ
カミがくらやみからでてきて、じぶん
のうしろから静かにすべるように走っ
てくるのに気がつきました。「オオカ
ミはにんげんをおそわないんだ。オオ
カミはトナカイだけをおいかけると
だ」とかれはじぶんにいい聞かせまし
た。同じ早さで歩いていてもかれのし
んぞうはどきどきしていました。オオ
カミたちはイガマックのあとをぶらぶ
ら歩きながらついてきました。ふたつ
の大きなはい色のかげはかれの足あと
をかきながらだんだん近づいてきまし
た。

前のほうをじっと見つめてみました
が、イガマックにはほんやりとした白
い雪しか見えませんでした。

オオカミたちはまだついてきまし
た。イガマックは走ったりこわがって
いるようすをオオカミに見せてはだめ
だということを知っていました。イガ
マックは毛皮のてぶくろのかたほうを
とって雪の上に落としました。オオカ
ミがてぶくろのにおいをかいでいる
間、イガマックは前を見ようと一生け
んめいでした。でもあかりはまだ見え
ませんでした。



オオカミがてぶくろをかぎまわっている間、イガマックはオオカミから少しはなれることができました。でもオオカミはすぐにてぶくろをあきらめてまたイガマックのあとをおってきました。

とつぜん、前のほうに市場のあかりが動くのが目にはいりました。イガマックは走りたかったのですが、オオカミが近づいていたので歩いて行きました。そして、残ったもうひとつのてぶくろを静かにはずしました。

少しオオカミからはなれることができます。それだけ市場に近づくことができるのです。またそうすればオオカミは立ち止まるだろうとイガマックは思いました。そこでイガマックは、もうかたほうのてぶくろをオオカミをめがけて投げつけました。オオカミはおどろいてあとずさりしました。それから用心深くそっと近づいて雪の上にある毛皮でおおわれたもののおいをかぎだしました。

イガマックは、あかりをめざして一生けんめいおちついたようすで歩きました。するとすぐ、市場のたてものが見えてきました。イガマックが村に近づいたとき、オオカミはしりごみし、ちょっとのあいだかれのうしろを見つけていましたが、やがてくらやみの中にきえて行きました。

イガマックは市場にかけこみましました。「デリーさん、ぼくのお母さんが

たいへんなんです。すぐ病院に行かないとだめなんです。」イガマックは大きな声で言いました。

デリーさんはしごとをされていてそがしかったのですが、いそいでむせんのスイッチをいれて、160キロも南にある町の空こうにれんらくしてくれました。

それからデリーさんはイガマックに言いました。「飛行機がすぐきてきみのお母さんを病院までつれていってくれるよ。きみの家がどこにあるか、おじさんがパイロットにくわしくおしえておいたからね。もう心配はいらないよ。」

イガマックは、飛行機のエンジンの音が聞こえるまでデリーさんの手伝いをしていました。イガマックには、飛行機の音が聞こえるまで何時間もたったように思われました。一度頭の上を通った飛行機がまたイガマックがいるたてものの上を飛んで行きました。イガマックはそのとき、お母さんが病院に行くとしゅうであることを知りました。

「さあ、少し休んで赤ちゃんがどうなったか知らせをまつことにしよう」とデリーさんが言いました。イガマックはうなずきました。しばらくいしながら待つ時間はとても長くかんじられました。でも、ついにむせん

のあいずがありました。デリーさんはイヤホーンを耳にあてて知らせを聞きました。

「きみにおとうとができたぞ」とデリーさんはほほえみながらいいました。

イガマックがはなしをしだすと、デリーさんは「静かにしなさい」というように手を上げていいました。「まちなさい。これはすばらしい。おとうとはふたりだ。ふたごが生まれたんだよ。」

イガマックはわらって、部屋じゅうをおどり始めました。「おとうとがふたりもいるんだ／ふたりなんだ／ひとりよりもふたりのほうが2ばいうれしいや／」とかれはさけびました。

「そうだね、さあ行こう、イガマック。きみのおばあさんに知らせに行くんだ。おじさんがきみをスノー・モービルにのせておくってあげよう。」デリーさんがいいました。

スノー・モービルにのって雪の上を走っているとき、イガマックはとてもうれしくて、オオカミのことやなくしたてぶくろのことはすっかり忘れていました。イガマックは、この2ばいもうれしい知らせをきいておばあさんのよろこぶ顔を見るのがとてもまちきれないようでした。

律法を超えた自由

もしよるしければ、ハンクス兄弟の指導を受けているシオンの若者たちにひと言申しあげたい。私は彼らを愛し、彼らはそのことを知っている。

ヤコブの息子のヨセフの話は、神が神を愛する者たちと「共に働いて、万事を益となるようにして下さる」という大いなる真理を、生き生きと描写している。（ローマ8：28参照）ヨセフは常に正しいことをしていたと思われる。しかしそれよりももっと大事なものは、彼がそれを正しい理由でしていたことである。それは何と重大なことであろうか。ヨセフは兄たちから奴隷に売られ、パロの侍衛長ポテパルに買われた。彼は契約書をもって買われた奴隷でありながらあらゆる経験と環境を、たとえ苦しくとも必ず良いものに変えていった。

すべてのことを良いものに変えるこの能力は、神の属性のように思われる。私たちの天父はいつもそのことができる御方である。いかに恐ろしいことでも、主にとってはすべてが勝利である。ヨセフはまったくふさわしからぬ奴隷の身でありながら、主に対する信仰を堅く保ち、まわりの卑しい環境を非常に良いものに転化した。このような人たちは敗北することがない。あきらめないからである。彼らは積極的な正しい態度を身につけている。デイル・カーネギーの表現がそれにあては



七十人最高評議員会会員
ハートマン・レクター・ジュニア

まるであろう。「あなたがレモンを持っているとしたら、何とすっぱいことかと不平を言うか、それでレモネードを作るか、それはあなたしだいである。」

「忍耐の顔に失敗は存在しない。」そのように主はヨセフを榮えさせられた。ヨセフの主人は主がヨセフと共にあるのを知って家中の持ち物をすべて彼の手ゆだね、つかさどらせた。ポテパルはこのすばらしい青年に絶大の信頼を置いたので自分は持ち物の管理に手をわずらわされなかった。

当然このようにすばらしい人は異性にとって魅力的であり、ヨセフもその例外ではなかった。ひと言で言えばいかがわしい人物であったポテパルの妻は、ヨセフを誘惑しようとした。しかしヨセフが主により頼んでいたために手を触れることもできなかった。ヨセフはポテパルの妻に説いて言った。

「御主人は……その持ち物をみなわたしの手ゆだねられました。この家にはわたしよりも大いなる者はありません。また御主人はあなたを除いては何をもわたしに禁じられませんでした。あなたが御主人の妻であるからです。……」（創世39：8、9）

彼はポテパルから信頼を受けていることをよく承知していたので、主人に対する忠誠心からこの言葉を守ったと思う人がいよう。しかしそうではなかった。なぜ女主人の求めに従うことができなかったかという彼の言葉に、このすばらしい青年の真の強さが表われている。彼は言った。「どうしてわたしはこの大きな悪をおこなって、神に罪を犯すことができますよう。」（創世39：9）この言葉によって、ヨセフは正しいことをしようと決意していたがそれを正しい理由のためにしたことがわかる。その理由とは、主を愛しているということである。

確かに、雇用主や友人や家族に忠誠を尽くすのはよいことである。忠誠は正直と似ている。もしあなたが正直でなかったら、本当に良い人ではない。自分に対して嘘をつく人は、自分に対して良くない人である。それは合理化と呼ばれているが事実は単なる嘘である。友人たちはあなたを信頼できないので、あなたは友人に対して良くない人である。主はあなたを使うことができないので、あなたは主に対して良く

エジプトに売られたヨセフから、神の戒めを守ることを学ぶ

ない人である。あなたはただ悪の手下に使われるだけである。あなたが失敗しても、すべてが失われることはない。あなたはいつも悪い模範として使われる。

ヨセフがなぜ主から愛されたか、あるいは聖典の言葉でなぜ「主がヨセフと共におられ……栄えさせられ」たかということは、ヨセフ自身が身をもってはっきりと示している。彼がより頼むのは主であった。彼は信頼を主に置き、主に忠誠を尽くした。

私は、シオンの若者が学ぶべき最大の教訓はこれであると信じている。すなわち主を愛しているがゆえに、正しいことをするという。これは非常に大切なので、主を愛する以外の理由で何ごとかを正しく行なってもあなたは誤っている。少なくとも大揺れに揺れる地面の上にいると私は思うのである。正しい行ないのその理由は、あなたを終りまで支えきれぬほどに強くはないであろう。都合や仲間からの圧力や誉れ、名声、賞賛や束の間のスリルなどの世俗的な理由に、あなたはいつか負けてしまうであろう。あなたの動機が主を愛する堅い基礎の上に立たなければ、耐え抜くことはできない。

今日このときに、すべてのものは変化しているように見える。現代では、侵食や腐敗、毎年繰り返される車のモデルチェンジのような単なる変化のための変化を受けないものは何ひとつないように見える。しかし私たちが一貫性を見い出せる唯一の場所がある。ヨセフも行った場所である。そこは主の

もとである。「イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変わることがない」からである。そして最も重要な事実、あなたはイエス・キリストのいない場所に行けないということである。詩篇作者の言葉にある。

「わたしはどこへ行って、あなたのみたまを離れましょうか。わたしはどこへ行って、あなたのみ前をのがれましょうか。わたしが天にのぼっても、あなたはそこにおられます。わたしがよみに床を設けても、あなたはそこにおられます。わたしがあげぼのの翼をかけて海のはてに住んでも、あなたのみ手はその所でわたしを導き、あなたの右のみ手はわたしをささえられます。『やみはわたしをおおい、わたしを囲む光は夜となれ』とわたしが言っても、あなたには、やみも暗くはなく、夜も昼のように輝きます。あなたにはやみも光も異なることはありません。」(詩篇139：7—12)

月を歩こうが廣大無辺の宇宙を探ろうが、深海の中、屋なお暗いアフリカに、ソルトレーク市に、主はおられるのである。

ああ、ただこのことを知り、地上の生ける予言者に目を向けられたなら、今日このときに、生ける予言者に従うことこそ、主なる神に従って主のみ旨を行なうことのできる唯一の方法である。死せる予言者を引きあいに出し、生ける予言者を無視し投石することによって、それはできない。現在の予言者ハロルド・B・リー大管長に従うことが、この朽ち果てる世にあって私た

ちの知り得る唯一の真の安寧である。

ヨセフの話の続きに戻ろう。私たちはヨセフの模範に従うことで、むしろ正しい事態をどう処すべきかを学ぶことであろう。聖書には、ヨセフは言い寄ってくるポテパルの妻をあくまで拒否したが、ある日「務めをするために」家に入ったとき、たまたま「家の者がひとりもそこにいなかった」(創世39：11)と記録されている。

さて、このような状態はいつも危険であり、万全を尽くして防がなくてはならない。ポテパルの妻はことさら執ように、上衣をつかんでヨセフを引き寄せようとした。しかしヨセフはこのような状況下でできる最善のことをしたのである。聖書に記されている。

「……ヨセフは着物を彼女の手に残して外にのがれた。」(創世 39：12)今の言葉で言えば、走って逃げたのである。

おそらくこの行為は、いかにもその場のがれに聞こえよう。しかし、ときには逃げることもできないことがある。このときがそうであった。ヨセフは彼女とふたりになるとは知らなかったに違いない。知っていたら家に入らなかったであろう。私はヨセフを心から信じている。

何よりも、危ない状態は用心が大切である。私たちは危険な状態を避けなくてはならない。そうでないと、負けるという大きな危険を犯すことになる。

私は自分の経験から、木の頂すれすれに飛ぶことが非常に危険であると知っている。私は26年間海軍の飛行士を

勤めたが、自分がどれくらい木の上すれすれを飛べるかを試して興奮した覚えがある。それは非常に危険なことである。木にすれすれの高度で飛んでいてエンジンが一度でもノックしたら、森に墜落するのである。

では海軍に、「森の上は飛行機を飛ばさないこと」という規則を要求することにしよう。実際海軍にはこのような命令がある。私がこの命令に縛られないで自由になるには、自分の規則を自分でつけ加えることが必要である。たとえば「木から五千フィート以上の距離を保って飛ばなくてはならない」というような。そうすれば、森の上は飛ばないという海軍の命令が守りやすくなり、安全度がはるかに増す。

明らかに後者の規則は自分でつけ加えたものであり、それを法と混同したり法のように説明したりしないように注意しなくてはならない。それはあなたが自分を守るために考え出したきまりである。もしそれを人に説いて聞かせようとするならば、そのとおりを説明すべきである。

私たちは、誘惑に負けるかもしれないような立場に身を置くことを慎重に避けなくてはならない。パウロはあらゆる種類の悪から遠ざかりなさいと勧めているが、それはたしかに、「すべての悪を捨て去り」「罪に陥ることなく」という主の戒めの追加である。(教義と聖約98:11; 88:86) 私たちがパウロの勧告に従うならば、主の戒めがずっと守りやすくなるのに気づくであろう。結婚前の若者が、危険な状態を

避けるために誘惑に対するとりでを築くことは非常に大切である。私はそのいくつかのとりでを提案したい。

1, 異性と1対1になる家には行かない。

2, 異性と1対1になる部屋には入らない。

3, ネッキングやベッティングをしない。聖典のどこにも主は「ネッキングやベッティングをしてはならない」と言っておられない。私はそのことを承知しているが、主は「あなたは姦淫やそれに類することをしてはならない」と言われているのである。

4, ふたりだけで暗い道に車を止めない。

5, いわゆるポルノ文学と呼ばれるものを読まない。

6, 成人映画を見ない。

7, 飲酒やギャンブルの施設で時間を過ごさない。

もちろんこれらは、個人的なきまりのわずかな提案でしかない。あなたは「あの人とは決してデートの約束をしない」というような自分だけのきまりを作るべきである。きまりはこれまでの経験や自分の弱点などによって、決まるであろう。

むしろ自分のとりでがいつも功を奏する保証はない。あるものは崩れるであろう。きまりを破ったり失敗したりすることもある。そのようなときにはヨセフのことを思い出し、彼の模範に従いなさい。あなたはいつでも走って「その場を逃れる」ことができる。主の戒めを破らないうちに逃げなさい。

たしかにヨセフは逃げた。そしてそのために社会から閉め出されて一時牢屋に入れられた。しかしヨセフがもし逃げなかったとしたら、おそらく永久に神の御前から閉め出されて永遠の囚われ人になったであろう。偉大な予言者になるに必要な、神との交通を受けられない状態になったであろうからである。

現代のシオンの若者が主の前に正しく歩み、主の戒めを守ってふさわしくなるならば、主は大きなすばらしい祝福を用意してくださる。それはこのように記されている。「目がまだ見えず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた。」(1コリント2:9) このような祝福は、ただ主の戒めに従順であることによつてのみ、もたらされる。

「そもそも創世の以前より天に於て定められた一つの変らざる律法ありて、あらゆる祝福はこれに基くなり。すなわち、われら何にても神より祝福を受くる時は、この祝福の基く律法に従うによりて然るなり。」(教義と聖約130:20, 21)

主はまたこのように言っておられる。「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。」(ヨハネ14:15)

私たちが主を愛するがゆえに正しく歩むよう、祈るものである。なぜならこれこそが正しい理由だからである。イエス・キリストの御名により、アーメン。

教会幹部の話から

人が指導者として成功するために必要な初歩的原則のひとつとして、指導者である前に真の改宗者でなければならぬとはよく言われることである。これは、宗教の世界にあっても同様に基本的原則のひとつである。最も容易ならぬ神への冒とくは口先だけの信仰であり、暴言をはくことではない。神はそうのように心は遠く離れているにもかかわらず、

口唇でもって近づこうとした人々に、幾度となく強い非難の言葉を浴びせられた。主は十二使徒の頭であったペテロにもこのように言われたことがある。「シモンよ……あなたが改宗したときには、兄弟たちを力づけてやりなさい。」(欽定訳ルカ22:31, 32)

シモン・ペテロは、自分では、もうすでに真に改宗していると思っていたので、そう言われたときに少し感情を害してしまったかもしれない。しかしその夜裁きの場で3度イエス・キリストを拒んだということは、まだ彼が完全には改宗していかなかったことを示している。またある人は、重大な宗教上の問題として、私たちのほとんどがただ単に「聖書だけのクリスチャン」であることを指摘している。と言うことはキリスト教の精神というものが主として聖書の中だけに存在し、それが私たち自身の中にあまり浸透していないということである。また、どんなに繁く大学に通ったとしても、もし大学での教育というものが幾分なりとも私たち自身の中に浸透していなければ、それは取るに足らないものである。同様に、確かに教会に行けば、すばらしい恩恵の生ずることもあるだろう。しかし、真に偉大なことは、教会の教えが私たちの中に入り込んできたときにのみ起こり始めるのである。

少し前に行なわれた調査の結果、質問を受けた人のうち、実に95%以上が、神を信じていると答えたという。しかしながら実際に主の真の弟子として、あるいは、主の教義に対する真の改宗者として数えられる人は、その数にはるかに及ばないであろう。かつて、正直というものを信じている1,000人の中に、実際に正直な人はひとりしかいないと言ったのはマハトマ・ガンジー(1869—1948)であつた。確かに、だれでも正直というものを良いことだと信じているであろうが、ここで更に私たちは、昼日中、ひとりの正直者を探し出すた

改宗者

十二使徒評議員会補助
スターリング・W・シル

めに、火をつけたランタンを手にアテネの町を歩き回った、あの哀れなディオゲネス(412—323ギリシャの哲学者)を思い起こすのである。もし仮に、私が正直というものを信じているかと聞かれたら、おそらく私は、少なからず気分を害してしまうことだろう。そして、私が正直というものを信じていると、あなたは当然知っているはずなの

にと思うだろう。ここで、ほんの少し前に、私が経験したことについて、話してみよう。

家族で、アリゾナからドライブして帰る途中、私たちは、ガソリンスタンドに立ち寄った。そこで給油してもらっているときに、子供のひとりが「ソーダを買って」と言ったので私は飲物の自動販売機の所へ歩いて行き、10セント硬貨をお金の投入口に入れ、まず、ひとびん出した。つぎに、また10セントを入れ、もうひとびん出し、またつぎに10セントを入れ、更にひとびん取り出した。ところがその機械は止まらずに、もうひとびん、ただでとび出して来た。結局、30セントでソーダびん4本を得ることができたのである。それを運んで車の方に歩いてゆきながら、「とにかく、もともとこんな物はお金をたくさん取り過ぎているんだから」と、自分に言い聞かせた。しかし、その時、私の頭の中でいつも働いているちっちゃな心の番人が騒ぎ立て始め、「ちょっと待ちなさい、スターリング! どうせやるなら、そんな10セントぼっちではなく、もっと大きなことをやらなきゃ」と、ささやきかけた。

もしそのソーダ水が25セントだったらどうしただろうか、と言うことはわからないが、とにかく私は、その販売機の所へ引き返し、10セントを入れてきた。さて、皆さん、私が正直というものを信じているかどうか、どうしてわかることができるだろうか? 私がそのことについて言う言葉によってあるいは、私以外にだれも見えていない自動販売機の所に行ったときの私の行ないによってであろうか? またあなた方は私が福音を真実なものとして信じているかどうか、どうやって言うことができるだろう。私が証会で語る言葉によってそれとも、私が教会でのいろんな責任を果たすやり方によってであろうか?

救いの福音を教えなさい

大管長 ハロルド・B・リー

愛する兄弟姉妹の皆様、そしてラジオ、テレビを通じてこの説教に耳を傾けている友人の皆様へ。

私は、しばらくの間、この偉大な大会に靈感が留まるよう願っている。

当教会が組織された日、そしてその後まもなくして、主の御言葉がこの神権時代の予言者に臨んだ。主は、この末の日にキリストの教会が設立されたことを宣言したあと、時の大管長に戒めを与え、「天より能力を彼に与え」たもうた。これは第一に「墮落したる或る民の記録と……イエス・キリストの完全なる福音」(教義と聖約20:8, 9)とを世に出すためであり、第二に世の光となし、教会員とこの光を求める非教会員とのためにひとつの旗となすためであり(教義と聖約45:9参照)、第三に、人々に主の降臨のために備えをさせるためであり、第四に、あらゆる国々に力を込めて完全なる福音を教えるためであった。『教会歴史記録』第4巻〔英文〕P.537)

国家に、そして世界に、重大な問題が山積みされている今日、世界中の人々は、人類を悩ます疫病の治療薬を捜し求め、また未解決のまま残されている世界の諸問題を解く鍵を捜し求めている。

古代の予言者たちは、誤った所で、誤った方法で解決法を求めて右往左往する現代の完全な挫折の時代を先見していたように思われる。予言者たちは次のような時代の来ることを先見していた。「わたしがききんをこの国に送る日が来る。それはパンのききんではない、水にかわくのものでもない。主の言葉を聞くことのききんである。」さらに予言者は語った。「……主の言葉を求めて、こなたかなたへはせまわる、しかしこれを得ないであろう。」(アモス8:11, 12)



この挫折の時代に、私たちにはあらゆる方面から様々の質問が寄せられているように思われる。例えば次のような質問である。

教会は人口過剰と産児制限の問題について、どのような立場をとっているのか。

墮胎に対する教会の見解はどうか。

世界中に満ちている、自由への脅威にどう対抗するのか。

反道徳的行為の洪水と少年犯罪の増加について教会はどのような見解をとっているのか。

家族のきずなを強め、不道徳の波を押し止め、自立と責任と道徳的肉体的訓練の必要性を教えるために、一体何ができるのか。

こういった諸問題に対する解決策はないのだろうか。

私の話を進めるにあたって、およそ10年ほど前、故デビッド・O・マッケイ大管長がこの説教壇から語られた、きわめて重要な説教を一部ここで繰り返してみたいと思う。

「この変化して止まない不穏な時代にあって、自由を愛する人々の最大の責任であり、また最高の義務とも言えるものは、個人の自由の確保に務め、

人と神との関係を宣言し、イエス・キリストの福音の原則に従順でなければならないことを高らかに宣べ伝えることにある。そうすることによってはじめて、人類は平安と幸福とを見出すのである。」(インブループメント・エラ1662年12月号P.903)

こう言うと、必ず質問が出される。では、この要請に対し私たちはどうすればよいのか、と。

使徒パウロがローマで捕われの身になっていたとき、彼はテモテに次のような手紙を書き送った。

「御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、それを励み、あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め勧めなさい。

人々が健全な教に耐えられなくなり、耳ざわりのよい話をしてもらおうとして、自分勝手な好みにまかせて教師たちを寄せ集め、

そして、真理からは耳をそむけて、作り話の方にそれていく時が来るであろう。」(Ⅱテモテ4:2-4)

再びマッケイ大管長の言葉を引用してみよう。

「パウロがこのテモテに送った最後の書簡の内容は、今日でも同じように重要なことである。すなわち……あらゆる所に住む教会員は『御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、それを励み(熱心で、まじめでありなさい、という意味である)』なさいということである。

今日、混乱した世界のただ中であって、真の末日聖徒の心の中には、何を宣べ伝えるのかという疑問はないはずである。その答えは、青天白日のごとく明らかである。……

簡潔に言えば、私たちが宣べ伝えるべき御言葉とは、福音の救いの計画である。

今日、人間の出来事においても神の導きが必要であると言うとき、他の人々をおもんばかって妥協的態度を取る人を見るのは、別に目新しいことではない。

しかし、私はあなた方に申し上げたい。時が良くても悪くても、永遠の父なる神に対する信仰と、その御子イエス・キリストに対する信仰と、聖霊に対する信仰を宣べ伝えなさい。

福音の計画の根本が個人の尊厳にあり、神の業と栄光が「人に不死不滅と永遠の生命とをもたらす」（モーセ1：39）ことにあることを宣べ伝えなさい。……

神が生きてましますことと、神の愛する御子が人類の贖い主であり、救い主であること、御子とその御名をいただく教会の頭に立っておられること、さらにはこの地上で主を代表するよう権能を与えた人々に、主が導きと靈感を与えておられることを宣べ伝えなさい。

この生命の計画を、生き方を、そしてこの救いの計画を宣べ伝える責任は全教会員に託されていることを説きなさい。だが、とりわけ、神権の職に按手聖任され、人々の間で指導者としてまた僕として召された人々に託されていることを説きなさい。」（「インブループメント・エラ」1966年12月号 P. 1093）

これらの永遠の真理は、1972年の今日においても、イエスがはじめて説いたときと同様に当てはまる。また、この真理は、人類の生命の続く限り、人類が進歩と幸福を求める限り、根本原理として、また必要欠くべからざるものとして残ることであろう。

話は、著名な教育者の言葉からの引用で続いている。

「世界で、社会的、政治的な刷新が可能であるとすれば、道徳面の理想を著しく刷新することを第一にしなければならない。」（ミズーリ大学、J・ウィリアム・ハドソン博士）

こう言うと、ある人々は即座に、しかもはんで押したようにそのような説は、余りに無邪気で、現実の時の流れに追いついていけない人間から出たも

のである、と嘲笑する。事実、昨今の社会科学を専攻する学生の中で、そう唱道する者もいた。だがそのような学生は、自分たちの知識が本当に微々たるものでしかないということを認識してはじめて、微々たる学問でも危険ではなくなるものだということを知らない学生であったことは言うまでもない。

時間があまりないため、私たちの世代を脅かす驚くべき問題を二、三取り上げて、若干の意見を述べるにとどめよう。

この教会の初期の迫害のさ中において、聖徒たちは、敵の脅威にいかに対抗すべきか、熱心に主に祈り求めた。

それに対し、主は次のように答えられた。「この故に汝ら戦を棄て平和を宣言し、子らの心にその先祖を思わせ、先祖の心に子らを思わせんことを熱心に求むべし。」（教義と聖約98：16）

そして、次のような重要な約束が与えられた。

「また、われ汝らに告ぐ、もし汝ら何事にまれわが命ずるところを守りて為さば、主なるわれ、すべて怒りと憤りとを汝らより去り、かくて地獄の門は汝らに打勝つことなかるべし。」（教義と聖約98：22）

教会の歴史の初期においては、次のような、啓発的な主の御言葉が与えられた。

「何人もその国の律法を破ることなかれ。そは神の律法を守る者はその国の律法を破る要なければなり。

この故に今ある権力に服従し、統治すべき権能を持ちてすべての敵を脚下に踏みつくる者の統治する時の至るを待つべし。」（教義と聖約58：21、22）

この神権時代の靈感を受けた予言者は、現在私たちが「信仰箇条」と呼ぶものの中で、この教会員の信条を宣言した。

「われらは、王、大統領、統治者、長官に従うべきを信じ、また法律を守り、敬い、支うべきを信ず。」（信仰箇条第12条）国家の危急存亡の際にも、私たちはこの宣言に従って、国の権威にも服するのである。

簡単に言えば、このとき聖徒たちが

言われたことは、敵との戦いを避けるため、戦いを捨て、平和を宣言しなければならず、またそのためには、まず家庭で親と子供が、平安に過ごすことから始めなければならないということであった。

主はさらに約束を与えて、もし怒りと憤りとが打破されるなら、サタンが聖徒たちに悪の力をふるっても、決して成功することはないであろうと言われた。

教会内においても、社会においてもこの悪に対する備えをどこで開始し、初期の段階で阻止できない場合、悪に対する戦いをどこで武装闘争に切り換えるかについて、主は一点の疑問も残されなかった。

主は、子供たちが主の前に正しく歩むように教える戒めを両親に与えた後私たちに主から見て喜ばしくない人々がいることを指摘された。主の御言葉によれば、「怠る者その中にあり、彼らの子らもまた今や次第に悪事に増長し、永遠の富を熱心に求めずしてその眼は食欲を以て充さるればなり。」（教義と聖約68：31）

この言葉をはっきり理解するならば私たちは、あらゆる悪の根源がどこに存在するのか、ずっと教えられていたことがわかる。私たちの子供たちは、これまで家庭で両親から正しく教えられてはこなかったのである。私たちの地域社会では、これまで、必要な物資を買うために働きたいと願う人々がいる場合、勤労を促さないで怠惰を奨励するような政策を採用し、怠惰や失業を最小限に抑える方策を採用してこなかった。

近代の開拓者たちの指揮者ブリガム・ヤング大管長は、開拓時代の政治家として、勤労の大切さについて、次のように語った。

「私の経験を通じて知り、私の信念となったことは、もし人が充分健康で、何かすることがあり、必要なものを働いて稼ぎ出せるのなら、人々に、金銭食糧、衣服などを与えることは決して益にならない、ということである。これが私の信念であり、私はこの信念に従って行動するつもりである。これと

私はすべての教会員が主の真実の旗印のもとに結束し、イエス・キリストの福音を雄々しく教えるよう勧めたい。また、それによって、真に改宗した人々が主の救いの計画に反して、論争に終始するような意見や方針と結託するようなことが決して起こらないよう切に願っている。



反対のやり方を説けば、世の中のあらゆる社会を破滅に導くことになるであろうし、またその社会を怠け者の集団に変えてしまうことであろう。」(「ブリガム・ヤング説教集」〔英文〕(デゼレト出版社1943年版) P. 274)

ここでしばらく本題から離れて、以前のこの朝の大会での話を引用してみたいと思う。何年か前、福祉計画が始められたときの指導者たちの言葉である。

「ただ単に人に食糧と衣服を与えるだけではない。無論それも重要なことは知っている。だが、それ以上に、永遠の性格をもつ人に、独力により、創造的な活動により、誉高い労働により、そして奉仕により、己を築き上げさせるのである。ここに教会保全計画の本質がある。怠惰な風潮に浸って育て上げられた世代は、その高潔さを維持していくことができない。」(リチャード・L・エバンズ「インプルーブメント・エラ」1936年第39巻 P. 768)

「当初から、福祉計画の遠大な目的は、与える者、受ける者を問わず、教会員ひとりひとりの人格を築き上げることにあった。このようにして、人の心の奥深くに存在する、あらゆる素晴らしいものを維持し、霊をあふれんばかりに豊かにし、実を結ばせるのである。そして、結局、ここに教会の使命があり、教会の存在する目的と理由があるのである。」(アルバート・E・ボウエン「教会福祉」〔英文〕(デゼレト日曜学校組合1946年版) P. 44)

教会員であるあなた方は、これら天から靈感によって与えられた諸訓戒を靈感あふれる指導者たちの言葉のとおり実行に移すために、全教会員に、家族を指導し、参加させる目的で、家庭の夕べの計画が与えられていることを認識しなければならない。これと関連して、主は、教会の福祉計画において現世の救いの計画を与えて下さっている。この計画では、だれでも、自分の能力の範囲で、労働と金銭によって施し物をしたり、奉仕をしたりするこ

とができる。また、それら奉仕の実から何ものかを受けることもできる。それは、困窮者自身もかつてはその実の生産者だったからであり、何ら当惑することも遠慮することもなく、必要に応じて、物資を受け取ることができるのである。

さらにこの上、主は子供と青年のための活動を開始するよう指図し、また教会の補助組織と神権定員会の組織で働く母親や父親に指示を与えられた。こうしてすべての人々が与える者となるように、あらゆる手段が講じられるのである。この教会の青少年のための活動を評して、ある外部の人は、注意深く観察した結果、次のように言った。「これほど数多くの立派な活動に参加する機会が与えられれば、悪い活動に心を向ける時間は、まずないでしょう。」

だれでも少し考えれば、こうした健全な社会一般の原則が、罪悪や失業や少年犯罪に悩むすべての地域社会に取り入れられなければ、不穏な空気と困苦の種が、正に主の警告のとおり、その極限にまで達することがわかるであろう。これら、正しい生き方の原則と主の救いの教えを適用することに注意を向けなければ、私たちは、悪の力がその手を伸ばして、家庭に、国家に、そして世界に挑戦してくることを覚悟しなければならないだろう。

こうなったとき、主御自身の予言にあるように、平和ではなく、つるぎが投げ込まれるのである。これは、息子をして「その父と、娘をその母と、嫁をそのしゅうとめと仲たがいさせるためである。そして家の者がその人の敵となるであろう。」(マタイ10:35, 36)

あなた方は、これが現実世界に世界中の数多くの家庭に起きていることに、気づいているだろうか。人類と世界を救う主の計画に、私たちの生活を完璧に適合させるために、さらに言葉を加える必要があるだろうか。もし私たち教会員が指導者の勧告に耳を傾けるなら主の言われた、次の約束が与えられる

であろう。

「……地獄の門も汝らに打勝たざるべし。而して、誠に主なる神は汝らの前より暗闇の力を追い払い、汝らの為と神の御名の栄光のためにもろもろの天をも震い動かしめん。」(教義と聖約21:6)

私たちは大胆に、世界のあらゆる所に住む高貴な人々も皆、全人類を祝福に導く同じ道を歩むよう促すつもりである。

だが、現在、全世界の教会員は、義の力と悪の力との間にたたかわされている、終りを知らない戦闘のために全力を尽くさなければならない。予言者ジョセフ・スミスは、彼自身の経験から、十二使徒たちに次のように話している。それ以来、私たちは皆、この言葉が真理であると証することができるであろう。ジョセフはこう言った。

「あなた方は、あらゆる種類の試練を経験することであろう。あなた方が試練を受けることは、アブラハムや他の神の人同様、全く必要なことなのである。そして……神はあなた方を追い求め、捕え、あなた方の心の琴線をひねり回すことであろう。だが、もしこの試練に耐えることができないなら、あなた方は、神の日の栄の王国において受け継ぎを得るにふさわしい者とはなれないであろう。」(ジョン・テイラー「説教集」第24巻〔英文〕P. 197)

再度申し上げる。ある人口過密国家において非常な貧困があったとしても神が時の初めに与えられた、「ふえよ、地に満ちよ」という神聖な戒めに従わず、人口制限をするような方策をとることは、由々しい罪である、とはっきり申し上げる。まことに、そのような方策を取り入れて、生命の誕生を妨害し、また誕生前や誕生後の生命を断ってしまうような人々は、神の罰という大きな報いを受けるであろう。神は侮られるような御方ではないからである。

現在非常に必要なことは、あらゆる可能な手だてを講じて、こうした不幸

な人々の間に見られる無知に打ち勝つため、世界的な運動を起こすことである。このような地域でこそ、主の救いの計画に範をとった、正しい生活と自制を教える根本的な原則、及び健全な経済原則を取り入れなければならないのである。

この教会は、その方法を示す上で先頭に立たなければならない。私たちがそうして、始めて古代の予言が成就し始めるだろう。予言者は次のように言った。「主の家の山は、もろもろの山のかしらとして堅く立ち、……すべて国はこれに流れてき、多くの民は来て言う、『さあ、われわれは主の山に登り、……彼はその道をわれわれに教えられる、われわれはその道に歩もう』と。律法はシオンから出、主の言葉はエルサレムから出るからである。」(イザヤ2:2, 3。ミカ4:1, 2も参照)

世界の国々に起こっている政治上の混乱に関して、私たちが切に祈ることは、このアメリカ合衆国と他の諸国とが、市民の自由と政治上の自由が保障されるような政治体制を取り入れて繁栄を続けようとするときに、予言者イザヤや予言者ミカに与えられた古代の予言が成就するのを心から待ち望みたい、ということである。その予言はすでに引用した、「律法はシオンから出主の言葉はエルサレムから出る」という予言である。その日が来れば、自由諸国の祝福と自由は、現実具体的なものとなるであろう。

最後に、自由の敵によって広く流布されている教えのうち、大きな危険をはらんでいるものをひとつとりあげてお話ししよう。それは、本質的には、私たちの愛する予言者であり、政治家でもあったJ・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長が、「聖典に記されている共同制度という主の計画を模倣したサタンの愚かな試み」と表現したものである。私たちの教会の現在の福祉計画は、教会員がこの共同制度という計画に従って生活するのにどの程度準備ができているかを知るための、いわば「予備訓練」とでも言えるものである。この原則を踏み行なったひとつの

実例として、「モルモン経」と呼ぶ古代の聖典に記録されているように、犠牲と奉獻の律法に完全に従って生きることにより、このアメリカ大陸に喜々とした平和な状態に達した民を見ることがするのである。この民は皆、改宗して主を信じたため、「富んでいる者と貧しい者との区別もなく、自由な者と奴隷との区別もなく、誰もかれも……天の賜を授けられた」ため、全地で「まことに……この民ほど幸福な民があるはずがなかった。」(IV ニーフアイ3, 16)

教会内の善意に満ちた人々の中にはイエス・キリストと神の王国の福音の偉大な原則を、いわゆる「宗教熱」と言われるようなものでおきかえて、これまで責任を果たしてきたように思い込んでいる人もいる。だがその結果は、動機がいかに誠心誠意であろうと、これらの危難に対処するために神の定めた神権の組織以外の団体を使うことにより、混乱を引き起こしてきただけである。そのようなことをしたために、これまで教会の兄弟同志に対抗するようなことがあり、そして、主が悪に対抗するために設けられた、教会と神の王国の神権組織という最大の武器の一致を弱めることもあったのである。そのような団体が二、三形成され、似て非なる方策と処置をとったため、教会から離れ、背教し、ついには教会から破門されてきたのである。

私たちが神権者の指導に従うなら、たとえサタンが領土を支配することがあっても、主は啓示の書のはしがきに記された約束を成就して下さるであろう。主は次のように約束して下さっている。「……主もまたその聖徒らを支配し、その真中にありてこれを統治せん。而して……この世に下る審判のために天より降り来らん。」(教義と聖約1:36)

私はすべての教会員が主の真実の旗印のもとに結束し、イエス・キリストの福音を、雄々しく教えるよう勧めたい。また、それによって、真に改宗した人々が主の救いの計画に反して、論争に終始するような意見や方針と結託するようなことが決して起こらないよ

う、切に願っている。

主は確かに神権を通じて聖徒たちのただ中で統治しておられる。主は、人の手による組織を通してではなく、私がこれまで述べてきたような組織を通して権能を委任しておられるのである。

話の結びにあたり、私は教会と国家と世界のために謙遜に祈りをささげたいと思う。もっと言うべきことがあることは重々知っているが、この祈りを通して、しばらくの間、あなた方と信仰をひとつにしたいと心から願っている。

「天にまします、われらの永遠なる父よ。今ここに集いたるわれらの祈りを聞きたまえ。激流のごとく世をおおいつつある悪の力を水泡に帰するためわれらのために思い、教会と世界の義しき男女がなしつつあるすべてのことを清めたまえ。あらゆる国民、部族、国語、民族に汝の偉大な贖いの計画をもたらさんとの熱意を、われらの内に燃やしたまえ。かくして汝の予言が成就し、水が大いなる深みをおおうがごとく真理が全地をおおう、その栄光の日を仰ぎ見ん。

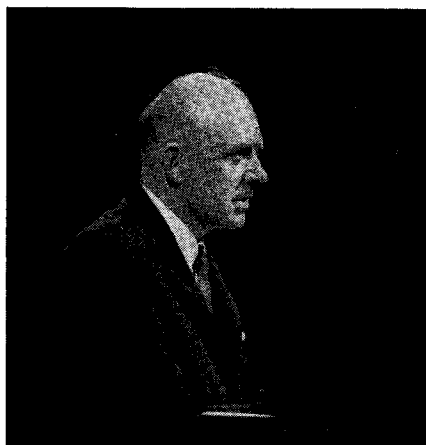
われらと汝の業が汝の目的に一致するそのときまで、汝の全能の力をもてわれらを護りたまうよう、願い奉る。われら、汝の守りの眼の保護のもとにわれらを置き、汝が決してわれらを見捨てず、汝の目的の成就に必要な指導を続けてたまわよう祈り奉る。」

私は、この心からの祈りに加えて、教会員と世の人々に向けて証を述べたい。それは、主イエス・キリストの贖いを通じ、「すべての人類が、福音のおきてと儀式とを守ることによりて救われる」(信仰箇条第3条)ことである。

私たちが携わっているこの業は、本当に主の御業である。主は生きておられ、私たちが主に近づくにふさわしくなるよう備えさえすれば、主はいつでも喜んで私たちに近づこうとしておられるのである。

私自身の個人的な経験から、今まで厳粛に申し上げたことが真実であることを知っている。主イエス・キリストの御名により。アーメン。

祭壇 天幕 井戸



七十人最高評議員会会員
A・セオドア・タトル

「それで〔イサクは〕その所に祭壇を築いて、主の名を呼び、そこに天幕を張った。またイサクのしもべたちはそこに一つの井戸を掘った。」
(創世25:26)

祭壇、天幕、井戸。イサクはアブラハムやヤコブのような人ではなかった。イサクは、「忠実な者の父」と呼ばれたアブラハムに及ばなかったし、また十二支族の父となった息子イスラエル(ヤコブ)のような強い印象を残す人でもなかった。それでもイサクは愛され、尊敬されている。イサクは神を礼拝し、家族の世話をし、自らの仕事に携わった人だった。イサクはただ平和の人として知られている。イサクのごく平凡な生涯と、日常の事柄を大切にする彼の才能とが、彼を偉大にしたのである。

祭壇、天幕、井戸、それは礼拝、家庭、仕事である。生活の基本となるこれらのものは神と家族と仲間に対する関係を表わしている。また、この地上に住む人はだれであっても、この3つにかかわりを持つのである。

イサクは石で築いた祭壇で祈りをささげた。そしてそこで、人生の疑問に対して答えを求めた。「どこから来たのか。なぜここにいるのか。どこへ行くのか。」

これはだれもが抱く疑問である。人はこの疑問を抱き続けてゆくのである。

聖書のみでは、この疑問に答えることはできない。しかし啓示に基づいた

宗教は、明確で確固とした回答を与えてくれる。回復された完全な福音によってそのことがわかるのである。すなわち、私たちは、この世が初まる前、日の栄光の家で天父と共に住んでいた。そしてそこで学び、進歩し、成長した。また肉体を得られるこの世に来ることを熱望した。さらに私たちは、回復された福音の原則と儀式に忠実であるならば、永遠の家族として結ばれ、復活後、天父のみもとに帰れるのである。

私たちは、啓示によって、天父が生きておられることを知っている。イエスは霊界にあって長子となり、この世にあっては独り子となられた。イエスはキリストであり、私たちの救い主、贖い主である。「人に不死不滅と永遠の生命をもたらす」ことが、キリストの御業であり、キリストの栄光なのである。(モーセ1:39)

私たちはイエス・キリストが生きておられることを知っている。それは、この末日の御業を打ち建てるため、この時代の人々にお現われになったからである。今日地上には、神より召され、神の神聖な目的を遂行すべく聖任されている生ける予言者や使徒がいる。真実にして唯一の現存する神の教会は、この末日聖徒イエス・キリスト教会である。そして神が選ばれた予言者は、ハロルド・B・リー大管長である。近代の啓示を主に感謝する。それは人生の大切な疑問に確固とした答えを与え

神、家族、仲間に対する関係

てくれ、また私たちは、その答えの中に、平安を見出すことができるのである。

神の御言葉と御業を知るために、イサクは祭壇を築き、その前にひざまずいた。イサク自身とその家族の家庭となった天幕は、今日の私たちの家庭がそうであるように、神聖なものであった。

末日聖徒にとって、家庭は聖い所であり、この世へ来る前の日の栄光の王国の家庭になぞらえられるものである。神権によって導かれる家庭は、最も気高く霊的なものである。

末日聖徒イエス・キリスト教会は、家族を重んじる教会である。従って伝道にあたって、私たちは家族を教会へ導くようにしている。家族を永遠に結ぶ原則を教え、それに必要な儀式を執り行なっている。確かに、この教会が第一に目的とするものは、家族を完全にし、昇栄させることにあると言うことができる。

今日、父親、母親、また子供のそれぞれの役割について、誤った考え方が広く行き渡っている。予言者ジョセフ・スミスは、家族の天命は、日の栄光の王国で家族が共に生活することにあると説明している。自己の役割を正しく理解するには、人の生命の永遠性、すなわち、前世での存在、現世にいる目的、将来行くべき道について知らな

ければならない。私たちの宗教では、このこと、いやそれ以上のことが説かれているのである。

男性は家庭の頭である。「説服と堅忍と、柔和と温情と、偽らざる愛とによって」諸事を管理し、運営しなければならない。（教義と聖約 121：41，42）

女性は家庭の心である。「主なる神は言われた、『人が一人でいるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう。』」（創世 2：18）

「ふたりの者は一体となるべきである。」（マルコ 10：8）

主の気高い僕のひとりであった J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は、女性の役割を永遠の観点から次のように定義している。これはイヴについて話していることだが、すべての女性への語りかけである。

「このようにして、神権の使命を果たすアダムの助け手、イヴが来たのであった。イヴは世界の創造の中で、最後に創造された者であった。……アダムは、イヴを与えられて、清らかな、輝くような、そして聖く美しい彼女を彼女のために手入れをし、守ってきた園に連れて行った。そこは、彼が築いた新婦の家であり、その当時から現在に至るまで、地上における天国の象徴となっている庭である。ふたりはそこで、地上の生活を開始し、最終的に

は、肉の幕屋が与えられるのを待っている無数の霊に、救いと昇栄の機会をもたらすのであった。

そしてイヴは、神のみことろと偉大な計画が実を結ぶよう、体の創造者となるのであった。

これが彼女の召しであった。

この日から、真の女性の最も大いなる栄光は、母親となることになった。

母親になるということは、何という奇跡であろうか。母親の能力は今やほとんど無限である。母親は、人に知られている中でも最も複雑な構造物を胎内で形づくる。

これが妻の、また母親の務めであり機会である。もし、母親がこの通りにできなければ、神の偉大な計画は失敗に帰し、神の目的は無に帰してしまう。……これは決して変わってはならない。

しかし、子供がこの試しの世界に生まれてきても、母親としての完全な栄光はまだ達成されない。……母親は、子供に食べさせるだけでなく、着物を着せなければならない。母親は昼の間世話をし、夜の間も見守らなければならない。……母親は、子供がひとりで歩けるようになるまで、よちよち歩くのを優しく助ける。……

このようにして、子供たちが独り立ちできるまで、母親は、自分で築いた地上の家庭に迎える霊を導き、励まし教え、必要に応じて命じ、昇栄への道

を前進させるのである。神が人にその目的地を与えるのであるが、その道に沿って導いていくのは、母親である。

これらの霊がすべての者の父のみもとにもどって行くとき、ふさわしい母はそこにいて、ふさわしい子供たちを迎える。……」（「不死不滅と永遠の生命」第2巻 P. 28—33）

妻と母親は、男性のなし得ないことをなす。男性はこのような素晴らしい驚くべき働きをする母親の前に、愛と畏敬の念をもって頭を垂れるのである。

母親としての崇高な役割に就いていながら、墮胎とそれに付随する悪を許し、神が女性に与えた役割を放棄することを公言する最近の傾向と、この考え方を対比しなさい。末日聖徒イエス・キリスト教会が主張し、教えている、永遠の計画に基づく女性の役割や立場以上のものを考え出すことは容易ではない。これは神から出たものであるもので、充分にこのことに注意を払うようお勧めする。

両親としての責任を顧みないことがあって良いはずはなく、また保育所や学校、まして教会へ両親の責任を転嫁することはできない。家族に対する責任は神の命令による。両親はこの命令に背くとき、永遠の救いを捨てることになる。

両親と子供のこのように意義ある神聖な関係からのみ、永遠の喜びが増し目的が、達成されるのである。ハロルド・B・リー大管長は、「いつでも教

会のために果たせる最も大切な仕事は各自の家庭の中にこそある」と言われた。

神は、シナイ山で律法をお与えになったあの大いなる日に、子供に対してこう言われた。「あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが、長く生きるためである。」（出エジプト20：12）

祭壇にひざまずき、天幕にいる家族のことを心にかけながら、イサクは、ほとんどの時間を自分が掘った井戸を見守ることに費やした。イサクの羊の群れは、その井戸水で養われたからである。イサクが水と土地と、自然に生える草にただ頼っていた時代の労働と今日の労働との間には、何の格差も存在しない。

次のような啓示が今日与えられている。「およそ己れの家族を扶養せざるべからざる男子には、ことごとく彼をして扶養せしむべし。」（教義と聖約75：28）

この世の初めに主は、「顔に汗してパンを食べ」るようにお命じになった。

末日聖徒イエス・キリスト教会は、1830年に回復されて以来、教会員を治める原則として、儉約と労働を奨励してきた。

今日主が激しく非難されるもので、怠惰以上に悪いものはない。

「汝怠惰なることなかれ。およそ怠惰なる者は働く者のパンを食することもなく、またその衣服も着るべからざ

ればなり。」（教義と聖約42：42）

「……およそ怠る者は主の前に憶えらるべければなり。……」（教義と聖約68：30）

「……怠惰なる者は悔い改めて行ないを改むるにあらざれば、教会の中に地位を与えらるることなし。」（教義と聖約75：29）

私が話した3つのうちのふたつの要素（祭壇、天幕）と調和をとって職業を選ぶようにしよう。正しい一日の報酬に対して、正直に働くようにしようではないか。農場や商店や事務所の仕事それ自体が目的ではなく、崇高な目的を果すための手段であることを知ろう。

イサクの時代から、物事の本質はほとんど変わっていない。アブラハム、イサク、ヤコブの神がまさに生きておられ、家族として果たすべき同じ役割があり、同じように働く必要があるのである。

祭壇、天幕、井戸、これは人生にとって欠くことのできないものである。神からの啓示による御言葉としてこの3要素を正しく評価する時、私たちにあってそれは素晴らしいチャレンジとなり、達成が得られるのである。

天父なる神よ、私たち子供らが、以上のことが永遠であることを悟り、それに従って振舞うことができるよう助け給え。イエス・キリストの御名によって願いたてまつる。アーメン。

主と誓約を交わす

主との約束を守ること、それが永遠の生命への導きとなる

私の話にもし表題が必要なら、「主と誓約を交わした。さあ、その誓約を守ろうではないか」とつけたい。

今朝の靈感あふれる大会で、私たちは皆、主と誓約を交わす特権に恵まれ、この時期に教会を導くよう選ばれた偉大な人々を支持し、助け、さらに弁護することを誓約した。

主は、人と交わられる第一の方法として、常に主の民、また個人と誓約を交わしてこられた。

聖典は、主がアダムやノア、エノクまたメルケセデクやアブラハムやその他の人々と誓約を交わされ、さらにまた古代のイスラエルの人々やジェレド人、ニーファイ人と誓約を交わされたことを告げている。

末日聖徒はまさしく祝福された民である。なぜなら、古代の民と同じ方法で、主は私たちひとりひとりと、また私たち一同と誓約を交わして下さったからである。

誓約とは、少なくとも2名の当事者によって交わされた約束であり、神聖な同意である。誓約は、効力と、拘束性を保たせるために、あらゆる関係者が、その中にうたわれている諸条件を



十二使徒評議員会補助
エルレイ・L・クリスチャンセン

守る必要がある。多くの人は、主が初期の予言者や民と交わされた誓約が、新しい誓約として再び地上に回復されたことを知らずにいる。

主は、新しい誓約を設けられる理由を明らかにされた。

「そは彼らわが儀式より離れ去り、わが永遠の誓約を破りたればなり。

彼らは主の義を打建てんために主を求めずして、あらゆる者おのが心のままに振舞いおのれらの神の姿求むれども、その姿は人の世の像にしてその本質は一個の偶像なり。そは古びてつい

にバビロンにて、すなわちついに亡ぶべき大バビロンにて朽ちん。

されば主なるわれ、この世に住める人々に襲い来るべき禍を知れば、わが僕ジョセフ・スミス（二代目）を呼び天より語りて彼に誠命を下せり。」（教義と聖約1：15—17）

この啓示の結果、予言者ジョセフ・スミスは「新しく且つ永遠の誓約」を回復するにあたって、主のみ手に使われる器となったのである。この「新しく且つ永遠の誓約」は、文字通り全き福音であり、その力、言葉、条件の中に、天父がこの地上の人間にお与えになったすべての誓約と戒めが含まれている。（教義と聖約 132：5—7，33：5，7）

この「新しく且つ永遠の誓約」は、福音を受け入れ、終りまで耐え忍んで福音の原則と儀式に生きようとするすべての人に、永遠の生命と昇栄さえもたらす道を備えている。主は次のように言っておられる。

「またかくの如く、わが永遠の誓約を世に遣りて世の光となし、またわが民とこの光を求め来る異邦人とのために一つの旗となし、わが前に道を備う

るためわが前に立つ一人の使となしたり。」(教義と聖約45：9)

そこで今日ここに、私たちにとってまた耳を傾けるすべての人々にとって道標となり旗印となるあらゆる力を備えた完全な誓約があるのである。

主の愛はすべての人に及んでおり、主は次のように告げておられる。「…世に住める人々よ。主なるわれは、これらの事を進んですべての人に知らせんと思うなり。そは、われは人々を偏り見る者にあらざれば……なり」(教義と聖約1：34, 35)

そこで私たちは、イエス・キリストの福音を教え、バプテスマを施すことが許されているあらゆる所へ、大勢の宣教師を送っているのである。

主がなぜ戒めを与えられ、主と誓約を交わすよう求めておられるのかを疑問に思っている人がいる。また次のように尋ねる人もいる。「もし主が私たちを愛しておられるのなら、なぜ戒めをお与えになるのだろうか。もし主が私たちを愛して下さるのなら、なぜ『こうしなさい』とか『そうしてはいけない』と言われるのだろうか」と。

この質問に簡単に答えるなら、主は私たちを愛しておられるので、戒めをお与えになるということである。主は何か私たち個人に、そしてこの世界に平和と成功をもたらすのか、また何がそれと反対のものをもたらすのか完全にぞ存じである。

どの父親も、そのことが子供に祝福をもたらすものであれば、子供をそのように導く(または制約する)ように天父もまた単に私たちを制約したり、重荷を負わせたりする目的で戒めや律法、誓約をお与えになるのではなく、むしろ正しい原則に忠実であることによって平安と成功を見出すようにと、それらのものをお与え下さったのである。

確かに、主が命じておられることをしてはならない。さもなければ、主が約束しておられる報いも祝福も得られないであろう。

「すべてわれによりて祝福を受けんと願う者は、その祝福を与うために定められたる律法と条件を創世の前より定められたるままに守らざるべからず。」(教義と聖約132：5)

教会員は皆、主と誓約を交わしている。これらの戒めや誓約は、決して苦しいものではなく、重荷になるものでもない。むしろ反対に、私たちを啓発し、高揚させ、安心感を与えてくれる有益なものである。私たちにとって戒めや誓約は、自発的な行動を促す手段であり、私たちが生涯の目的を果たし究極の目標に達する努力を集中できる上で助けとなるものである。

私たちは、バプテスマを受け、教会員に確認されるときに最初の誓約をする。老若を問わず教会員は皆、バプテスマを受ける候補者となるときの条件

「もし主が私たちを愛しておられるのなら、なぜ戒めをお与えになるのだろうか。もし主が私たちを愛して下さるのなら、なぜ『こうしなさい』とか『そうしてはいけない』と言われるのだろうか。」

や、バプテスマ後に会員として守るべき責任を理解し、心に留めておかなければならない。主はそれらの要求や期待を、次のように確固とした明確な言葉で述べておられる。

「……およそ神の御前に自ら低くへりくだりてバプテスマを受けんと心に願い、真にへりくだりたる心と悔いる精神を以て進み出で、真に自己の罪をすべて悔い改めたことを教会員の前に証明し、進んでイエス・キリストの御名をその身に引き受け、而して終りまでキリストに仕えんと決心し、罪の赦を得るまで『キリストのみたま』を受けたることをその行いによりて真に明らかにする者は、すべてみなバプテスマによりてキリストの教会に受け入るべし。」(教義と聖約20:37)

そこで、バプテスマを受ける備えをする人は、バプテスマという神聖な儀式を受けることによって、主と特別な誓約を交わし、主に特別な義務を負うことを悟らなければならない。

主の晩餐、すなわち聖餐にあずかるとき、私たちは、主の戒めを忠実に守るという神聖な誓約を結び、また主の御名を受け、常に主を忘れず、主より与えられた戒めを守ることを主に証明するのである。真に厳粛な気持で聖餐にあずからなければならない。

また神権を受けることに同意するとき、私たちは、正しい立派な生活をし、他人に奉仕するために与えられる召し

をよく果たし、常にあらゆる人に親切と思いやり、礼儀と愛を示して、神権を尊ぶことを主と誓約する。

さて、もしバプテスマのときの誓約を守り、神権とそれにかかわる誓約を尊び、他の面でも福音の原則に従って生活するなら、私たちはやがて聖なる神殿に参入する素晴らしい特権にあずかれるのである。この神殿内で、私たちは、神権によるより尊い儀式を受け、時が来ると、次のような約束を得て、「新しく且つ永遠の結婚の誓約」として知られている神権の秩序に入ることができる。その約束とは、もし私たちが主と交わした誓約に忠実であるなら第一の復活の朝に義人と共に出来て来て伴侶や子供、さらには子孫と共に永遠に幸せな状態で生活できるというものである。もちろん、これらの人々にもまた、必要な誓約を守るという条件が伴っている。

この約束は、家族を愛するすべての人の心に、何という希望、慰め、確信喜びをもたらしてくれることであろうか。まさしく次の言葉は真実である。「目がまだ見ず。耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた。」(1コリント2:9)

また当然のことながら、主は自分を愛する者は戒めと誓約を守るはずだと言っておられる。

ジョセフ・F・スミス大管長は、私た

ちに、次のことを気づかせて下さった。

「私たちは、(これらの)誓約の精神意義、意向、目的を無視し、軽んじ、逃れることはできない。……私たちは主の祝福にあずかり、『みたま』の賜物とするしにあずかる栄光、力、特権資格を自分で摘み取る(失う)ことのないように、天父と誓約を結んだのである。」(「インプレーヴメント・エラ」第9巻、[英文] P.813)

神は、まさしく侮られることはない。(ガラテヤ6:7参照)

繰り返し申し上げたい。私たちはそれぞれ聖なる場所で主と誓約を交わし、主の律法を守ることを神の御前で同意したのである。この主の律法は、結局私たちが、神のあらゆる賜物のうちで最大のもの、すなわち神が永遠の生命と言っておられ「家族の王国」での生活を送るための資格を得る上で学ばなければならない原則である。

兄弟姉妹、私は神が生きておられることを証申し上げる。また神は、私たちを愛しておられるが故に、失敗や悲しみ、失望から免れ、終りまで忠実に耐え忍ぶ者に約束されている全き栄光を受けられるようにと、誓約を交わして下さったことを証する。

兄弟姉妹、私たちは誓約を交わした民である。従って誓約を守る民となろうではないか。以上をイエス・キリストの御名によって申し上げる。アーメン。

悩める 人の ために

ロバート・J・マシュー

罪の誘惑が来ることは避けられない。しかし、それをきたらせる者は、わざわざである。」(ルカ17:1)

聖句は、私たちが他の人に対して罪を犯そうとすると、また人から苦しめられるとき、私たちのよき導き手となります。

イエスはこう言われました。「あなたの頬を打つ者にはほかの頬をも向けてやりなさい。」(ルカ6:29)

「もし、だれかが、あなたをしいて一マイル行かせようとするなら、その人と共に二マイル行きなさい。

敵を愛し、迫害する者のために祈れ。

あなたがたが自分を愛する者を愛したからとて、なんの報いがあるか。……兄弟だけにあいさつをしたからとて、なんのすぐれた事をしているだろうか。そのようなことは異邦人でもしているではないか。」(マタイ5:41, 44, 46, 47)

末日の啓示の中で主はこう言われました。

「古えわが弟子たちにして陥入れんとする機をねらい心中互いに相赦すことなき者ありたるが、彼らはこの悪のために苦し^{はなはだ}また甚^{こゝろ}しき懲^{こうむ}しめを蒙りしなり。

この故にわれ汝らに告ぐ、汝ら互いに赦し合うべきなり。そは、人その兄弟の過ちを赦さざれば、その人主の前に罪に

値する故にして、そは更に大いなる罪なお彼に在ればなり。

汝ら心の中に言うべきなり。神をして汝とわれとを審き、また汝の行為によりて汝に報いを与えしめよ、と。」(教義と聖約64:8, 9, 11)

「苦難を耐え忍^{しの}び罵^{のの}る者に罵^{のの}り返すことなかれ。柔和を以て家を治め然も毅然たれ。」(教義と聖約31:9)

パウロは聖徒たちに向かって、こう勧告しています。

「すべての無慈悲、憤り、怒り、騒ぎ、そしり、また、いっさいの悪意を捨て去りなさい。互いに情深く、あわれみ深い者となり……互いにゆるし合いなさい。」(エペソ4:31, 32)

あなたがたは、神に選ばれた者……であるから、あわれみの心、慈愛、謙そん、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍びあい、もし互に責むべきことがあれば、ゆるし合いなさい。……

キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。……」(コロサイ3:12, 13, 15)

また、パウロはテモテに次のような助言を与えています。

「キリスト・イエスの良い兵卒として、わたしと苦しみと共にしてほしい。」(Ⅱテモテ2:3)そして聖徒たちには、こう教えています。「悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい。……それをもって、悪しき者の放つ火の矢を消すことができるであろう。」(エペソ6:11, 16, 教義と聖約3:8, 27:17参照)

「火の矢」という言葉は、神の戒めを守ろうとする人に対する不親切な言葉や行ないを表わすときによく使われます。

ペテロは次のように書いています。

「愛する者たちよ。あなたがたに勧める……異邦人の中にあって、りっぱな行ないをしなさい。そうすれば、彼らは、あなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのりっぱなわざを見て、かえって……神をあがめるようになる。」

善を行うことによって、愚かな人々の無知な発言を封じるのは、神の御旨なのである。

悪いことをして打ちたたかれ、それを忍んだとしても、なんの手柄になるのか。しかし善を行って苦しみを受け、しかもそれを耐え忍んでいるとすれば、これこそ神によみせられることである。……キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと模範を残されたのであ

る。

（キリストは）ののしられても、ののしりかえすことをなさらなかった…。」（Ⅰペテロ2：11，12，15，20，21，23）

また、ペテロはこうも言っています。

「最後に言う、あなたがたは皆、心をひとつにし、同情し合い……悪をもって悪に報いず、悪口をもって悪口に報いずかえって、祝福をもって報いなさい。」（Ⅰペテロ3：8，9）

悩んでいる人は、自分自身の内に閉じ込めて落胆し、そのために不快な気分になるものです。悪王アハブは非常にこの傾向が強く、霊的に未熟であったことが書かれています。王はナボテがぶどう園を売らないと言ったので不愉快な気持ちになりました。列王紀にそのことが記されています。「アハブは……悲しみ、かつ怒って家にはいった。……アハブは床に伏し、顔をそむけて食事をしなかった。」（列王上21：4）

それのみならず、傲慢や不遜な人というものは、義しい者の叱責に我慢ができないものです。そのような人は自分自身を傷つけ、人に反抗します。レーマンとレミュエルはこのことをよく表わしています。彼らは弟のニーファイが自分たちの指導者となり、自分たちを指揮するのを不快に思いました。不平を言い、つぶやき、働くことを拒んだことでそのことがわかります。彼らの父であるリーハイは、彼らにこう言いました。

「また、ニーファイが思った通りをはっきり言ったのでお前たちは不平を鳴らして、彼はきびしくした、彼は自分たちに怒ったなどと言うが、ごらん、彼がきびしいのはニーファイに宿った神の言葉の力のきびしさによるのであって、またお前たちの言う怒りとは神にそなわる真理に外ならない。」（Ⅱニーファイ1：26）

アハブも同じように真理よりもプライドを大切にしている心の狭い人でした。彼は予言者ミカヤについて次のように言っています。「……彼はわたしについて良い事を預言せず、ただ悪い事だけを預言するので、わたしは彼を憎んでいます。」（列王上22：8）

聖句を見ると、傲慢でわがままな人は、往々にして責められたり正されたりすると憤るものです。しかし謙遜な人は人の指摘を感謝し、迫害を耐え忍び、信仰をもって終りまで耐え忍ぶことができるよう、主にその力を求めます。



日本名古屋伝道部新設

日本における主の御業の発展により各地に伝道所、支部が開設されている中で、新しく日本名古屋伝道部が誕生。

初代伝道部長として佐藤悟兄弟が召された。

佐藤部長は1914年6月3日生まれ支部長、地方部、ステーク部長会で働かれた。また31年間ハワイ警察に勤務されていた。

佐藤姉妹は1918年5月15日生まれバプテスマを受けて以来扶助協会で働かれた。



日本西部伝道部

中国地方部

広島支部	宇部伝道所
〃 2付属支部	呉伝道所
福山付属支部	徳山伝道所
松江付属支部	山口伝道所
柳井支部	

北部九州地方部

福岡支部	長崎支部
〃 2伝道所	佐世保伝道所
〃 3伝道所	佐賀伝道所
北九州支部	大分支部
黒崎付属支部	大牟田伝道所
門司付属支部	久留米伝道所
下関付属支部	
熊本支部	
〃 2伝道所	



アーサー・敬一・西本兄弟：新伝道部長に就任。

渡辺部長の後任として召された西本部長は、1923年8月23日生まれ、職業陸軍将校であった西本部長は、第二次世界大戦の第442戦闘連隊に従軍。この隊は日本人2世3世で構成され、合衆国陸軍の歴史上、最も活躍した隊である。昨年、陸軍大佐として退役された。ワード部・ステーク部において数々の責任を歴任されている。

西本姉妹は1923年8月31日生まれ世界中のワード部や支部の補助組織で働かれた。

南部九州地方部

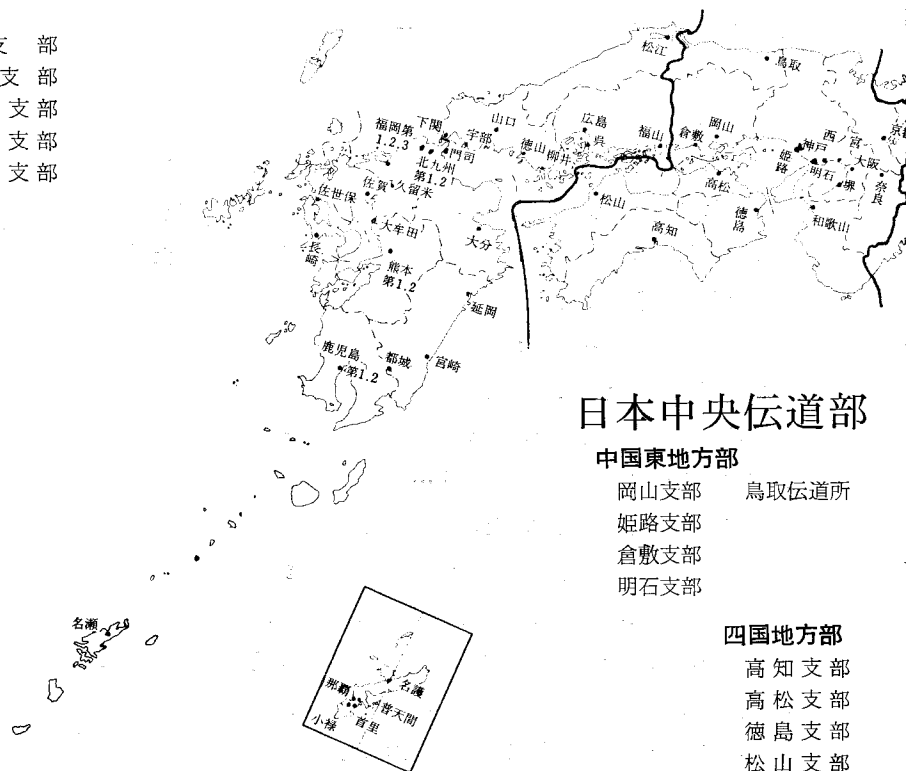
鹿児島支部	宮崎伝道所
〃 2付属支部	都城伝道所
	延岡伝道所
	名瀬伝道所

沖縄地方部

那覇支部
普天間支部
小禄付属支部
首里付属支部
名護付属支部

中部地方部

名古屋第1支部	岐阜支部
〃 2 〃	豊橋支部
〃 3 〃	岡崎支部
〃 4 〃	津支部
〃 5 〃	一宮支部
〃 6 〃	
名古屋第7伝道所	



日本中央伝道部

中国東地方部

岡山支部	鳥取伝道所
姫路支部	
倉敷支部	
明石支部	

四国地方部

高知支部
高松支部
徳島支部
松山支部

日本東伝道部

北海道地方部

札幌支部	札幌東伝道所
旭川支部	札幌北伝道所
小樽支部	岩見沢伝道所
室蘭支部	帯広伝道所
	北見伝道所
	釧路伝道所
	苫小牧伝道所
	函館伝道所

静岡地方部

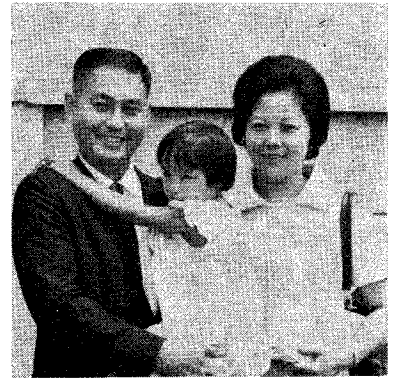
静岡支部	富士伝道所
沼津支部	
浜松支部	

北陸地方部

金沢支部	
小松支部	
福井支部	
富山支部	

東北地方部

仙台支部	会津若松伝道所
福島支部	秋田伝道所
山形支部	石巻伝道所
青森支部	郡山伝道所
	酒田伝道所
	八戸伝道所
	弘前伝道所
	盛岡伝道所



日本伝道部

東地方部

いわき支部	長岡伝道所
宇都宮支部	桐生伝道所
群馬支部	足利伝道所
前橋支部	熊谷伝道所
新潟支部	小山伝道所
三条支部	
水戸支部	
日立支部	

西地方部

甲府支部	
長野支部	
松本支部	
諏訪伝道所	

大阪ステークス部

大阪ワード部	堺支部
〃 2 〃	吹田支部
〃 3 〃	尼崎支部
岡町ワード部	和歌山支部
京都ワード部	守口支部
神戸ワード部	高槻支部
西の宮ワード部	奈良支部
	池田伝道所

東京ステークス部

東京ワード部	八王子支部	朝霞付属支部
東京第2ワード部	国立支部	大宮付属支部
〃 3 〃	藤沢支部	川口付属支部
〃 4 〃	町田支部	府中伝道所
〃 5 〃	千葉支部	柏伝道所
横浜ワード部	小田原支部	川崎伝道所
横浜第2ワード部		上大岡伝道所
浦和ワード部		
ひばりヶ丘ワード部		

小泉小太郎兄弟：新伝道部長に就任
堀内部長の後任として召された小泉部長は、1931年11月1日生まれ、セントルイスのワシントン大学で建築学の学士号を受け、設計事務所を開いて活躍。監督、高等評議員、ステークス部長会などを歴任された。

小泉姉妹は、1935年6月31日生まれ、ステークス部YWMIA書記、祝福師の書記として働かれた。

